

調査区中央部東側で検出した。検出長は187 cmであり、調査区外に延びる。断面は箱形を呈し、深さは29 cmである。湖西産の須恵器甕の破片1点、南比企産の須恵器坏破片1点が出土している。

第18・20号溝跡（第599・600・603～606図）

調査区中央部を東西に横断する大規模な溝跡である。

第20号溝跡は断面箱葉研状の溝跡であり、0.66～0.99 mと深く掘り込まれる。土層は一括して埋め戻されている。第18号溝跡とはほぼ平行して検出されているが、東部では重複関係にあり、第18号溝跡が新しいことが確認される。

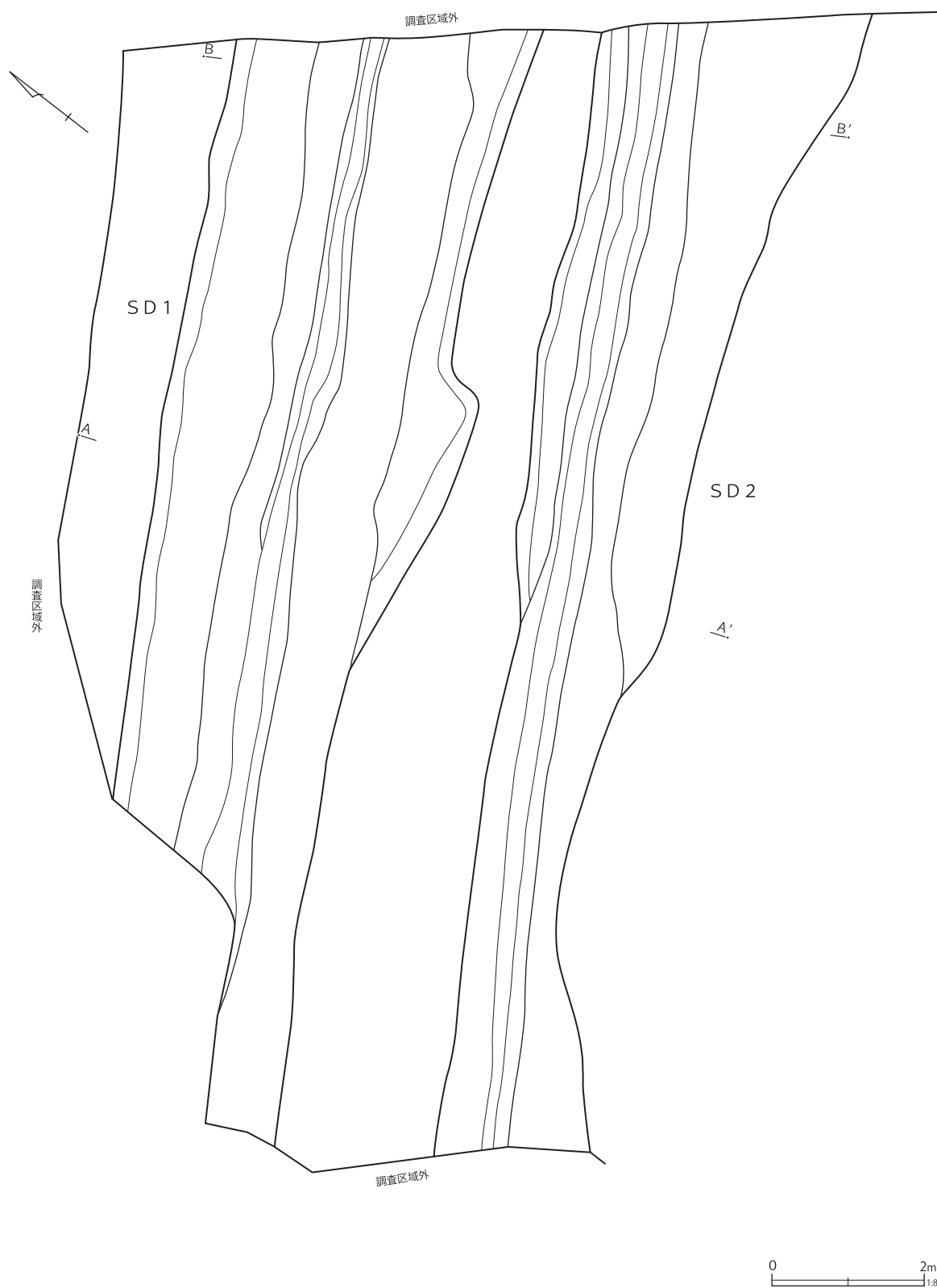
第18号溝跡は、断面V字状の大規模な溝であり、深さは0.63～1.01 mである。土層の堆積状況から何度も掘り直されたことが窺われ、当初は覆土の22～24層を下部とする箱葉研状の溝であった可能性がある。埋没と再掘削を繰り返し、最終的には覆土上層部がU字状の溝として機能していたと考えられる。

遺物は、第18号溝跡から陶磁器類が多く出土している。第603図5～第605図68に示した。5～24には磁器類を示した。5～10は肥前系の碗である。6・7は外面に二重網目文が染付けられる。8は雨降文、5はコンニャク判で菊文が染付けされる。これらは18世紀前半の所産である。9は外面にワンポイントで崩れた笹文が染付けられる小坏で、18世紀後半～19世紀前半の所産である。同様の小坏破片は8点認められた。10は草花文が施される所謂「くらわんか手」の粗製碗で18世紀の所産である。12も「くらわんか手」の粗製碗で、高台内に裏銘が染付けられる。同様の粗製碗破片は10点が出土している。11は瀬戸美濃系の碗で、外面に草花文が施される。19世紀中葉頃の所産である。13～15は肥前系の筒形碗である。いずれも18世紀後半頃の所産である。16は肥前系の猪口で全体に被熱して、釉に貫入が多い。

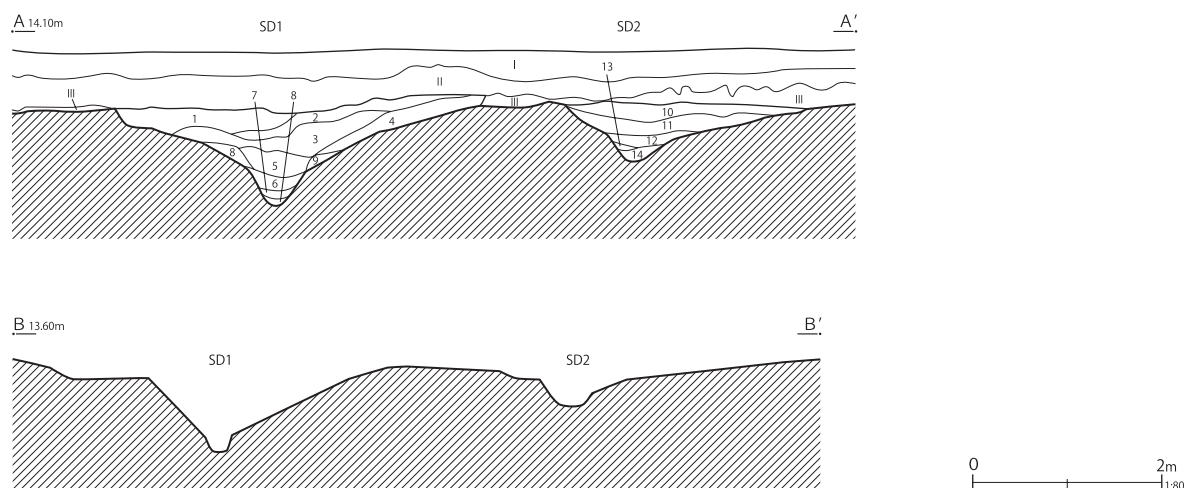
17は全面に青磁釉を施した肥前（波佐見）系の鉢である。直接接合しない複数の破片から図上復元した。17世紀後葉～18世紀前葉の所産である。18・19は肥前系の鉢で全面に青磁釉を施す。同一個体の口縁部と底部と考えられる。口縁部は輪花状を呈する。20・21は肥前（波佐見）系の粗製皿である。21は被熱している。いずれも18世紀の所産である。22はクロム青磁釉を施釉した皿で、見込み部にクロムを顔料とした型紙によって文様を摺り出し、白盛で花卉が表現される。明治10～20年代の所産である。23は肥前系の香炉底部片とみられ、高台内は露胎とする。24は肥前系の白磁蓋付壺と考えられる。18世紀以降に類例が認められる。

25～63に陶器類を示した。25～28に碗類を示した。25は瀬戸美濃系の天目茶碗底部片である。天目茶碗は他に体部破片2点が出土している。26は京都信楽系の半球形碗である。同種の碗破片が計12点出土している。27は肥前系の京焼碗底部片である。28は貫入が多い透明釉に梅が上絵付けで描かれる。高台畳付のみ露胎とする。近代の所産と考えられる。29は瀬戸美濃系丸碗の底部と思われる。内面には透明な灰釉が施され、大きな貫入が認められる。重ね焼きに伴う目跡が明瞭に残る。高台は回転糸切り後、浅く削り出される。16世紀後半～17世紀初頭頃に比定される。

30～38に皿類を示した。30は織部志野鉄絵皿である。内面に銅緑釉が施されるが、釉むらが激しく長石釉はほとんど認められない。31は瀬戸美濃系の菊皿で、内外面とも黄瀬戸釉が施釉される。32・33は高台脇が削り込まれる瀬戸美濃系の皿である。32は直重ね焼き痕を、33は内面と外面高台内にピンの痕跡が認められる。34は内面に鉄絵が施された摺絵皿である。35は肥前系の灰釉皿で破損面を砥具に転用される。36は褐色の鉄釉が施される皿で胎土は硬質である。外



第 591 図 第 1・2 号溝跡 (1)



- | | | | | |
|--------|-----------------------------------|------|------|--|
| SD 1・2 | | 6 | 黒褐色土 | 灰色粒子多量 |
| I | 灰褐色土 表土 荒川の土の埋土層 根っこなどが多量に入る | 7 | 黒褐色土 | 灰色粒子少量 |
| II | 灰褐色土 表土 荒川の土の埋土層 灰色粒子多量 | 8 | 黒褐色土 | 灰色粒子微量 しまりあり |
| III | 暗灰褐色土 I、II層が混入する層 灰色ブロック少量 | 9 | 黒褐色土 | ローム粒子多量 ロームブロック（3cm大）微量 |
| SD 1 a | | SD 2 | | |
| 1 | 黒褐色土 ローム粒子少量 灰色粒子・灰色ブロック多量 | 10 | 黒褐色土 | ローム粒子（粗粒1mm大）多量 ロームブロック（2～3cm大）・灰色粒子少量 |
| SD 1 b | | 11 | 黒褐色土 | ローム粒子（粗粒1mm大）多量 ロームブロック（1～2cm大）少量 |
| 2 | 灰褐色土 表土層の流れ込み | 12 | 黒褐色土 | ローム粒子少量 ロームブロック（1cm大）微量 |
| 3 | 黒褐色土 ロームブロック（2cm大）少量 表土層がブロック状に入る | 13 | 黒褐色土 | ローム粒子少量 |
| 4 | 灰褐色土 ロームブロック（1cm大）微量 表土層多量に含む | 14 | 黒褐色土 | ローム粒子少量 ロームブロック（1cm大）少量 しまりあり |
| 5 | 灰褐色土 表土層多量に含む | | | |

第 592 図 第 1・2 号溝跡（2）

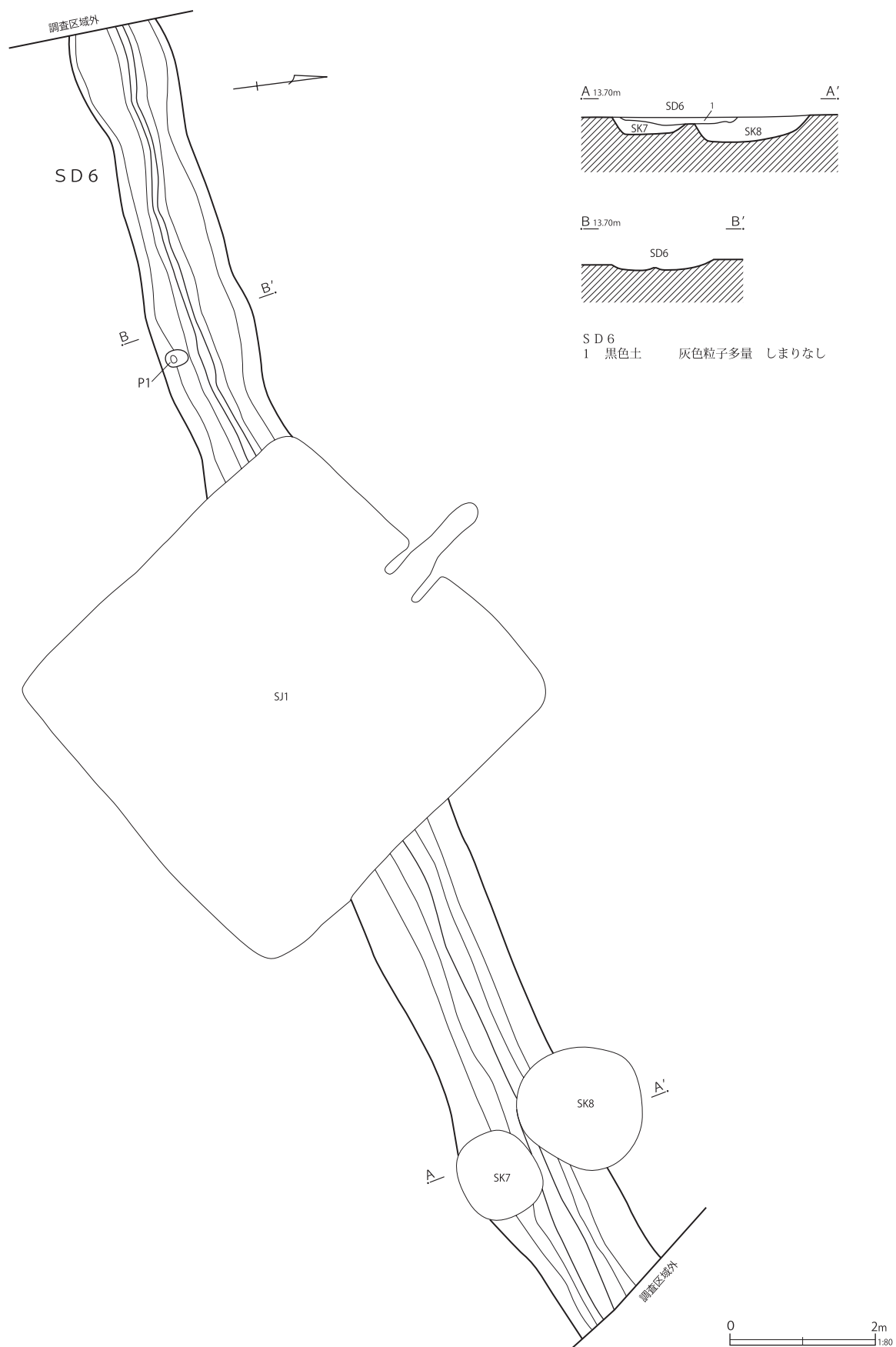
面露体部に煤が顕著に付着する。37・38 は瀬戸美濃系の鉄釉灯明皿である。他に同種の油皿破片が 1 点出土している。

39～43 は鉢類である。39 は小型の片口鉢で薄く灰釉が掛けられる。同器種が他に 2 個体出土している。40・41 はこね鉢ないし片口鉢の類で、光沢のある灰釉を掛ける。40 は口縁部を丸く収めるもので、同種の破片が他に 2 点出土している。42 は底部から直線的に体部が立ち上がるもので、光沢のある灰釉を掛ける。41 は瀬戸美濃系か地方窯系か判断に迷うところであるが、他は瀬戸美濃系の製品である。43 は肥前系で、内面には白色釉で刷毛目状装飾が施される。44～50 に播鉢を示した。このうち 44～46 は瀬戸美濃系陶器である。46 は大窯第 3 段階に比定され、錆釉に近い鉄釉が施される。口唇部が砥面として二次利用されている。瀬戸美濃系の播鉢は他に体部 4、底部 1 点が出土している。47 は明石堺系で、胎土は炝器質に焼き締まり備前の製品に近い。

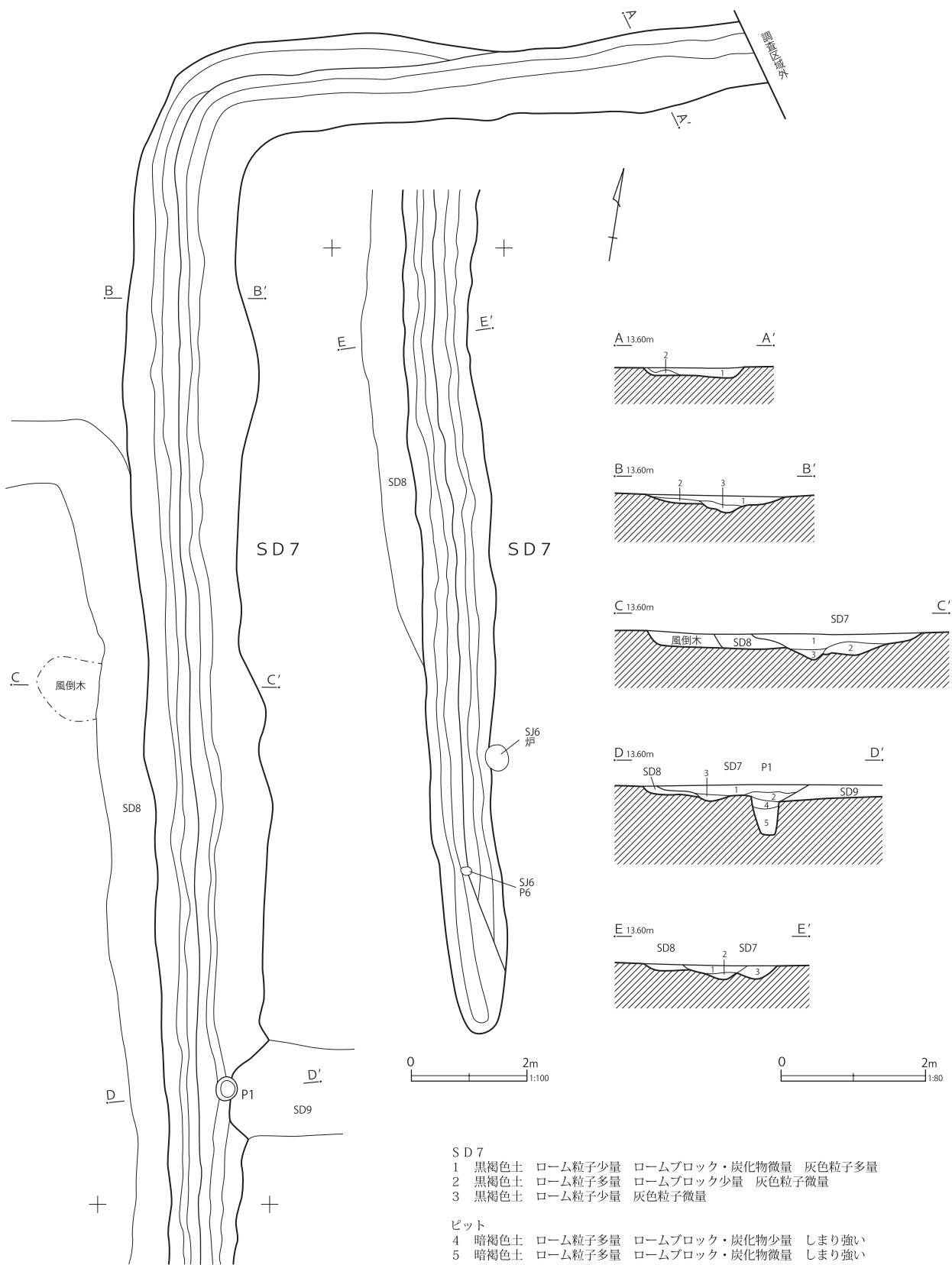
48・49 の胎土は明石堺系の製品に近いが、両面に黒味を帯びる鉄釉が施される。50 は明石堺系の播鉢で、底面の一部に板目状の圧痕が認められる。

51～55 に德利を示した。51～54 は瀬戸美濃系の德利である。51・52 は所謂尾呂德利で、頸部にウノフ釉が流し掛けされている。53 は光沢のある灰釉が施され、点刻状に釘書きされている。54 は底部で黄褐色の灰釉が施される。灰釉を施す德利破片は、他に 4 点出土している。55 は志戸呂系の德利である。56 は瀬戸美濃系の有耳壺と考えられる。口唇部上端面の釉を僅かに拭き取っており、重ね焼きのような痕跡が残る。58 は瀬戸美濃系の半胴甕である。57 は常滑焼の壺底部である。

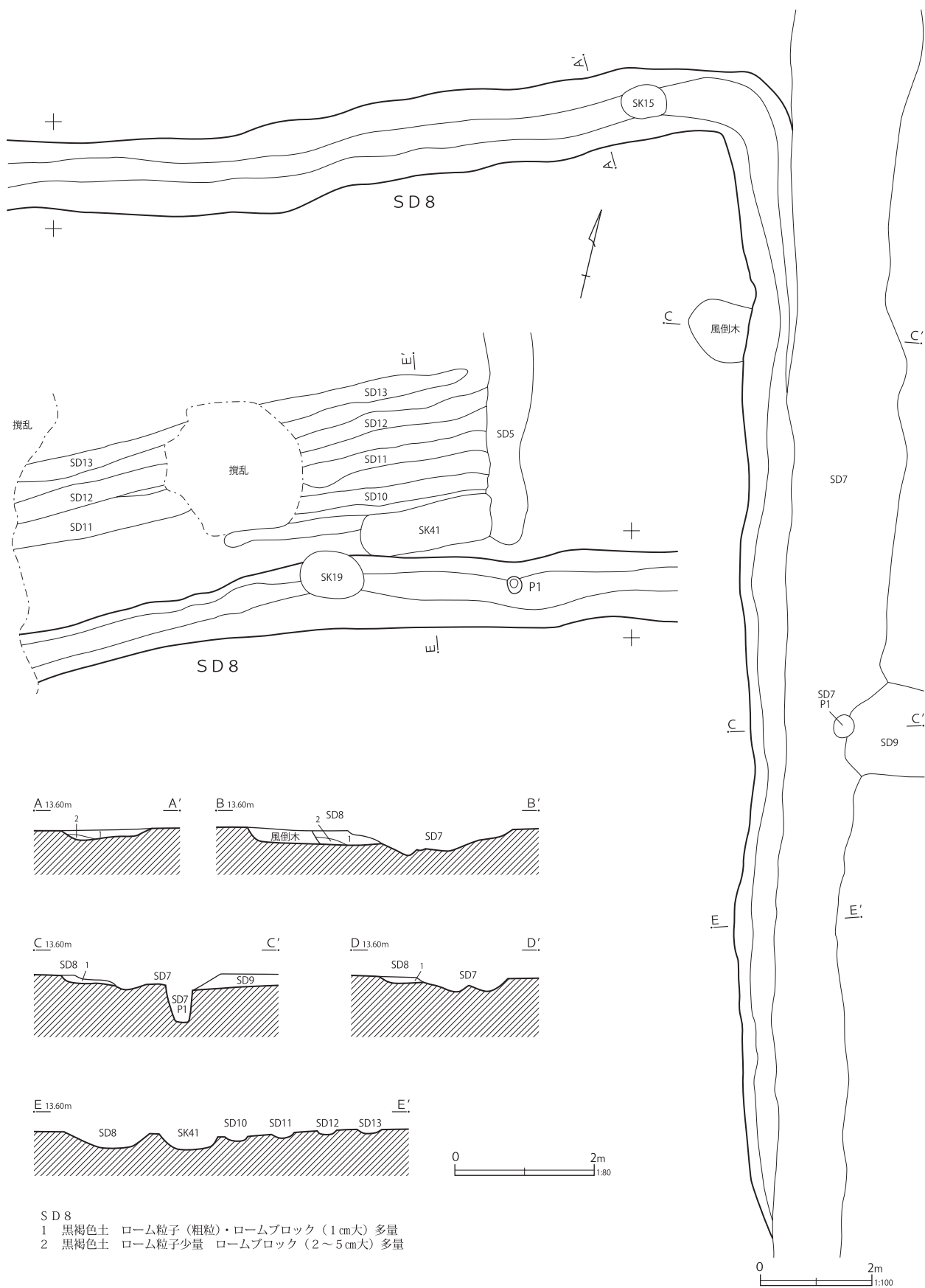
59～61 はいずれも鉄釉が施される香炉である。59・61 は光沢のある茶褐色の釉薬が施される。60 は口縁部を露胎とし、小香炉の破片と考えられる。62 は京都信楽系陶器の蓋である。63 は土瓶



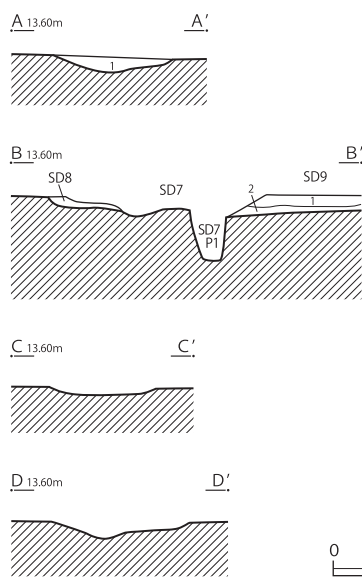
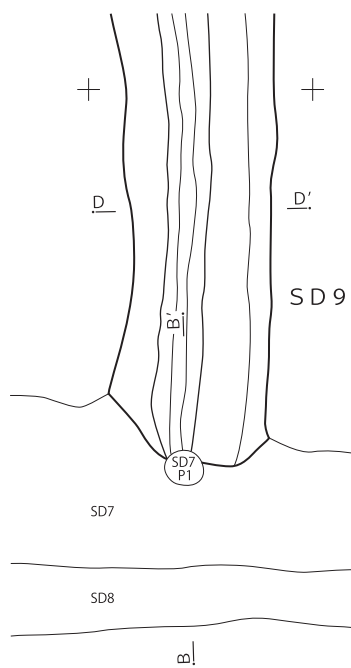
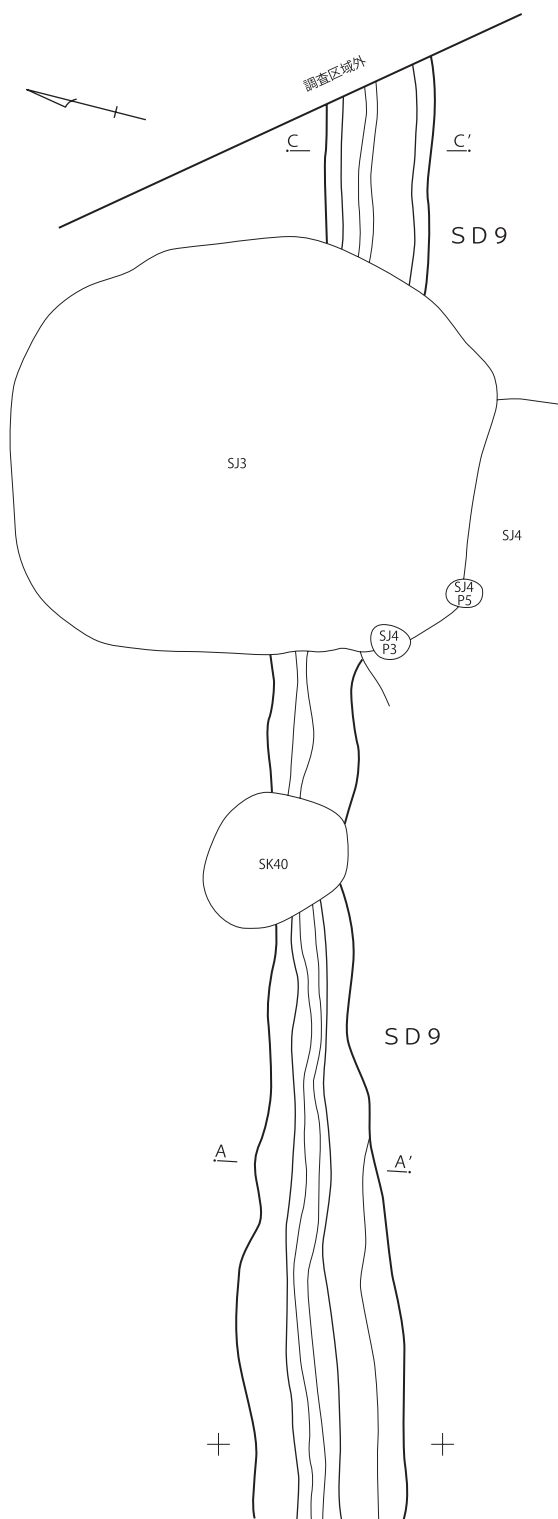
第 594 図 第 6 号溝跡



第 595 図 第 7 号溝跡

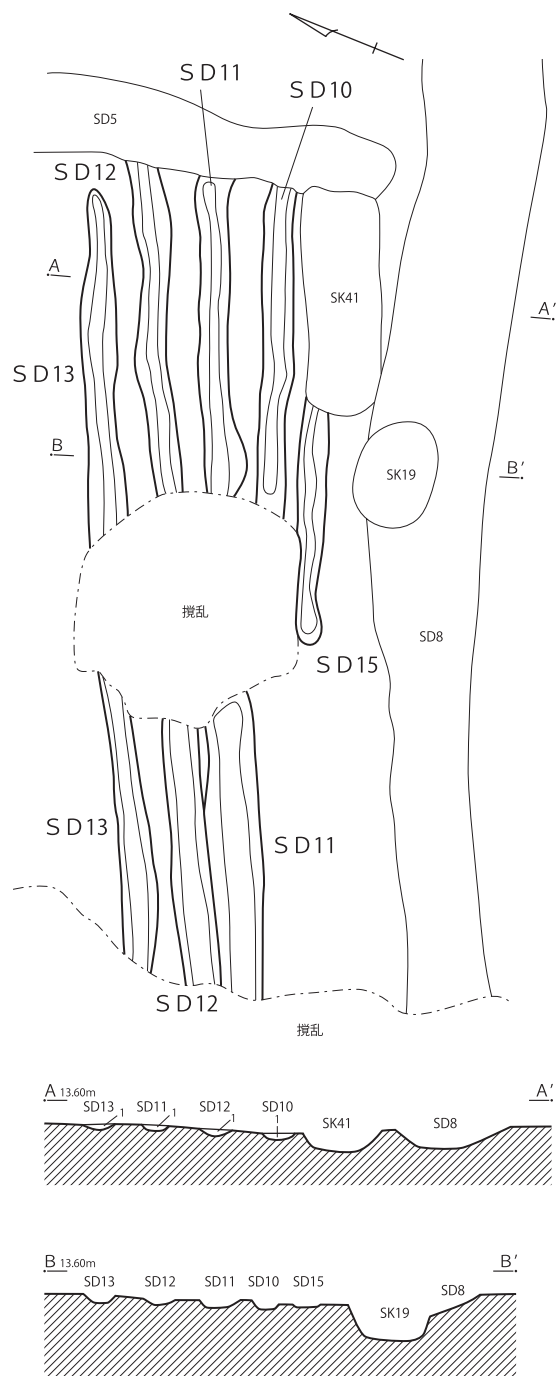


第 596 図 第 8 号溝跡

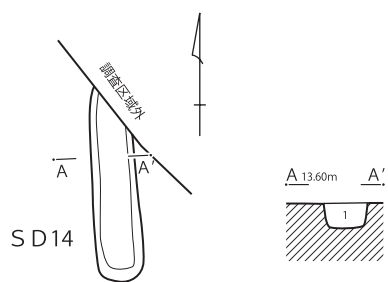


- SD9
 1 黒褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大) 少量
 2 黒褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大) 微量

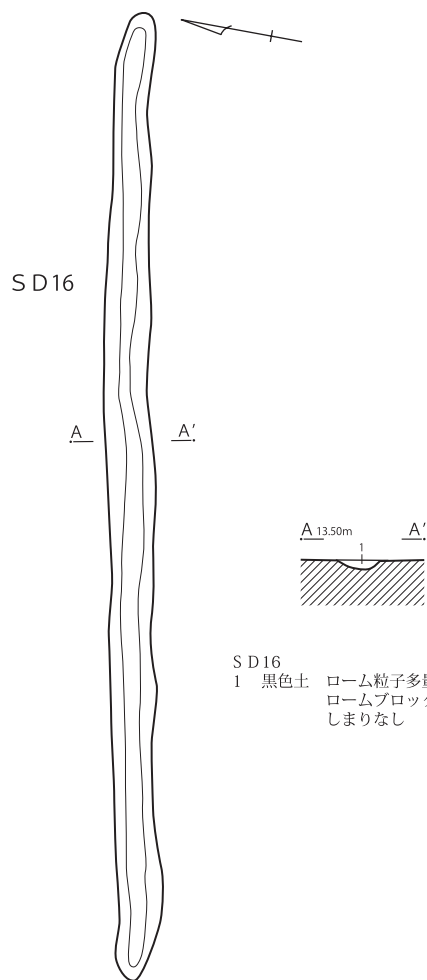
第 597 図 第 9 号溝跡



SD10 ~ 13
1 黒色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1 ~ 2cm大) 少量 畑の痕跡



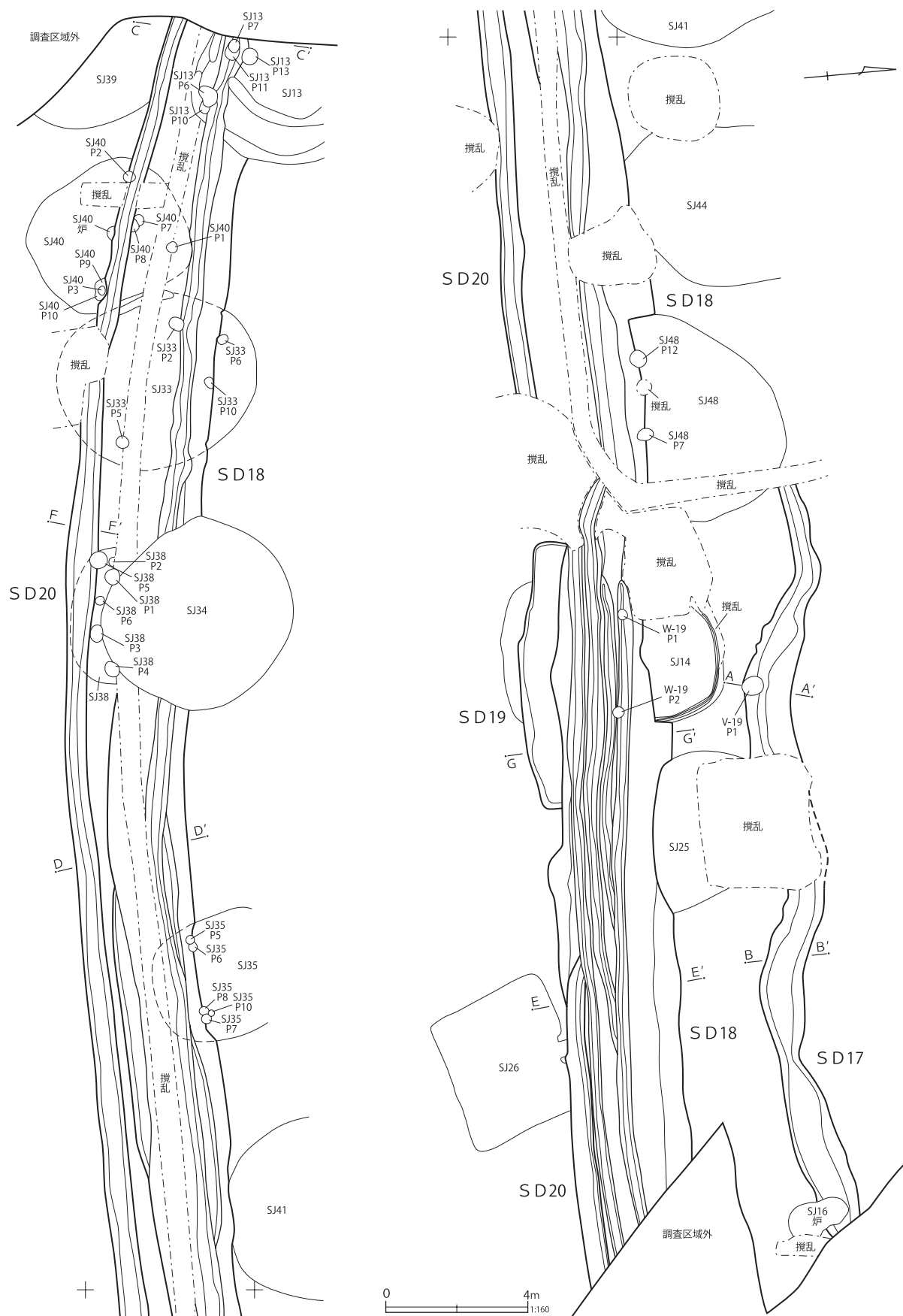
SD14
1 黒色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量
しまり弱い 粘性弱い



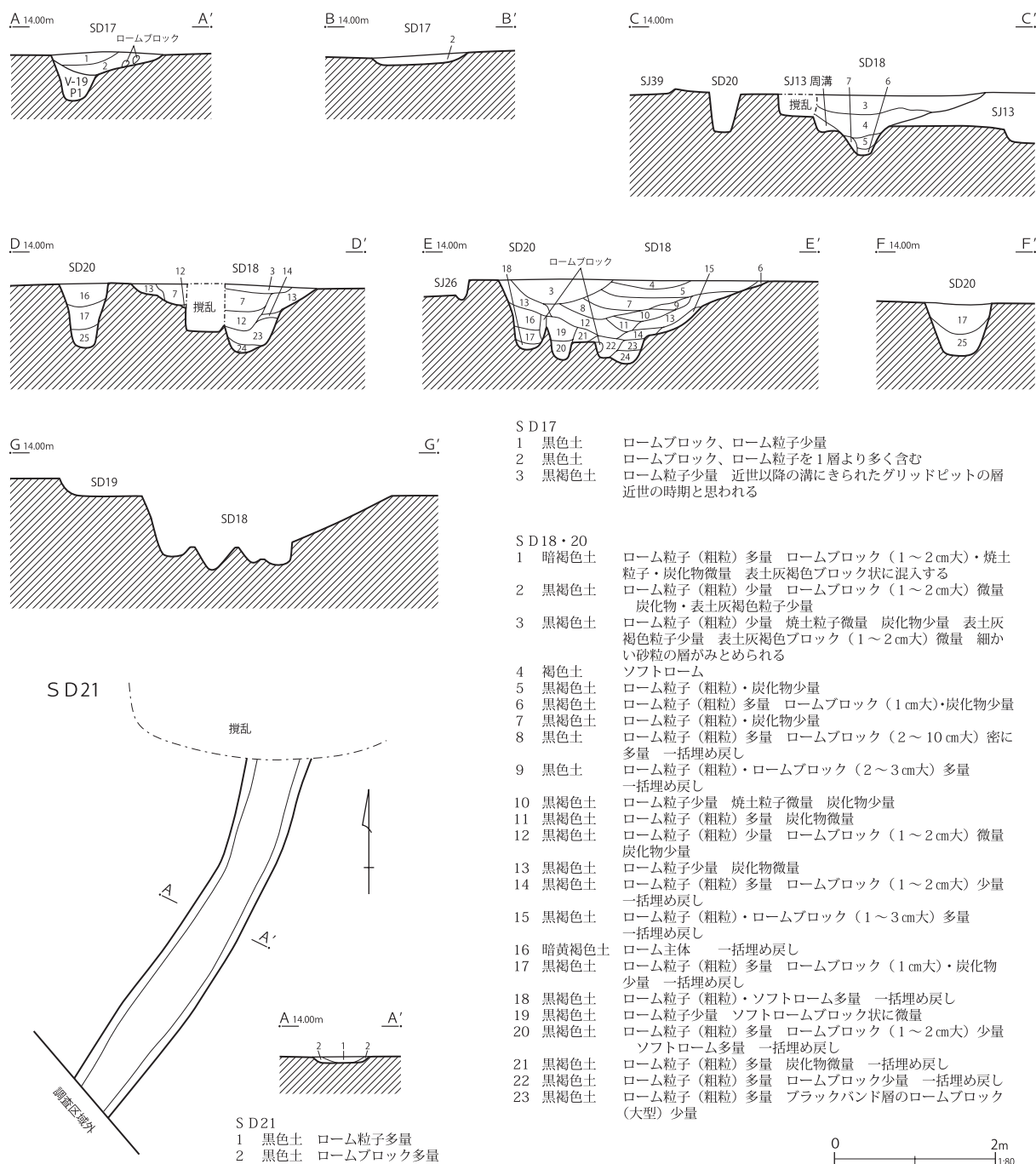
SD16
1 黒色土 ローム粒子多量
ロームブロック微量
しまりなし



第 598 図 第 10 ~ 16 号溝跡



第599図 第17～20号溝跡(1)



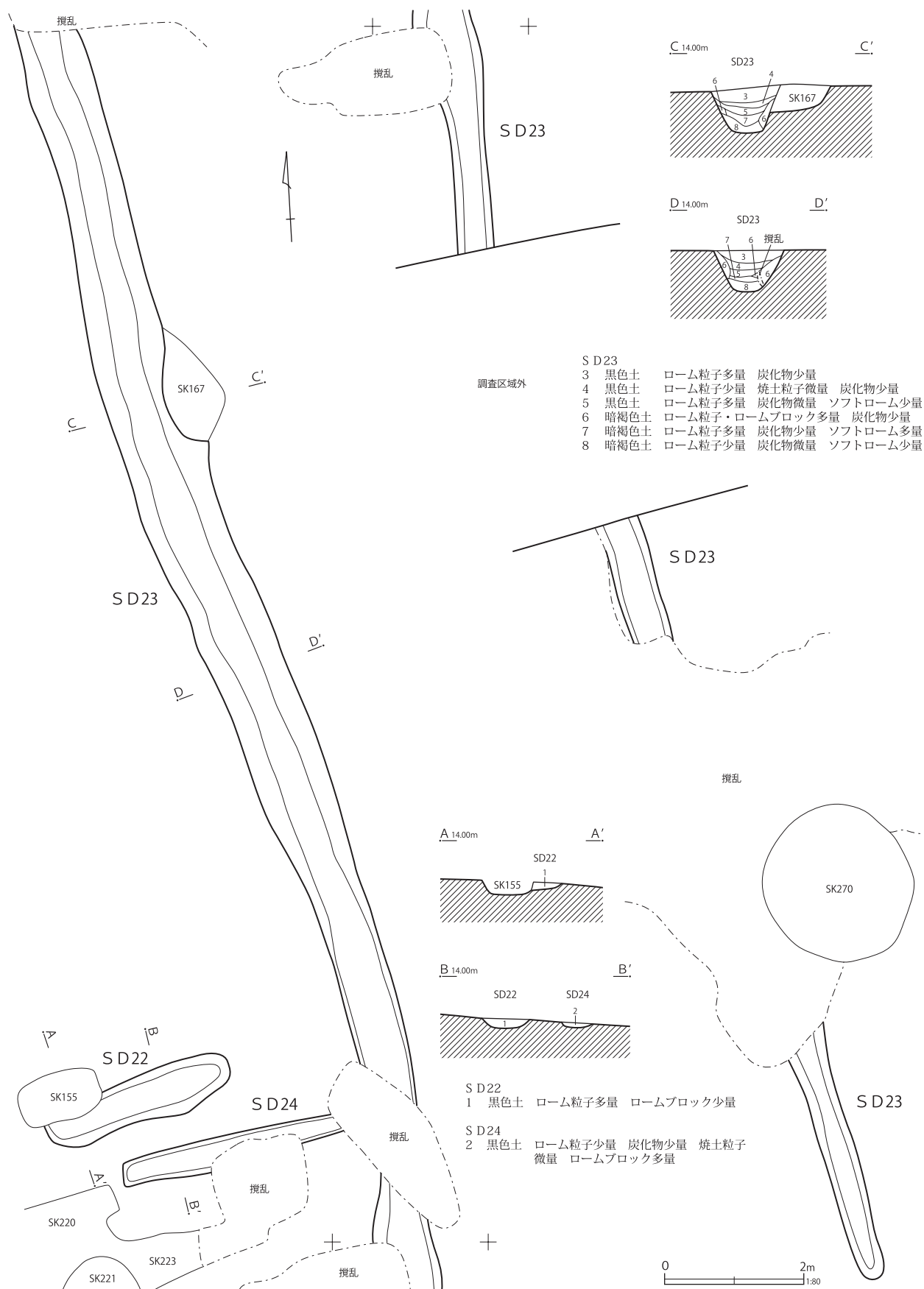
第600図 第17～20号溝跡(2)・第21号溝跡

の注口で、灰釉は白色味が強く細かい貫入が多い。

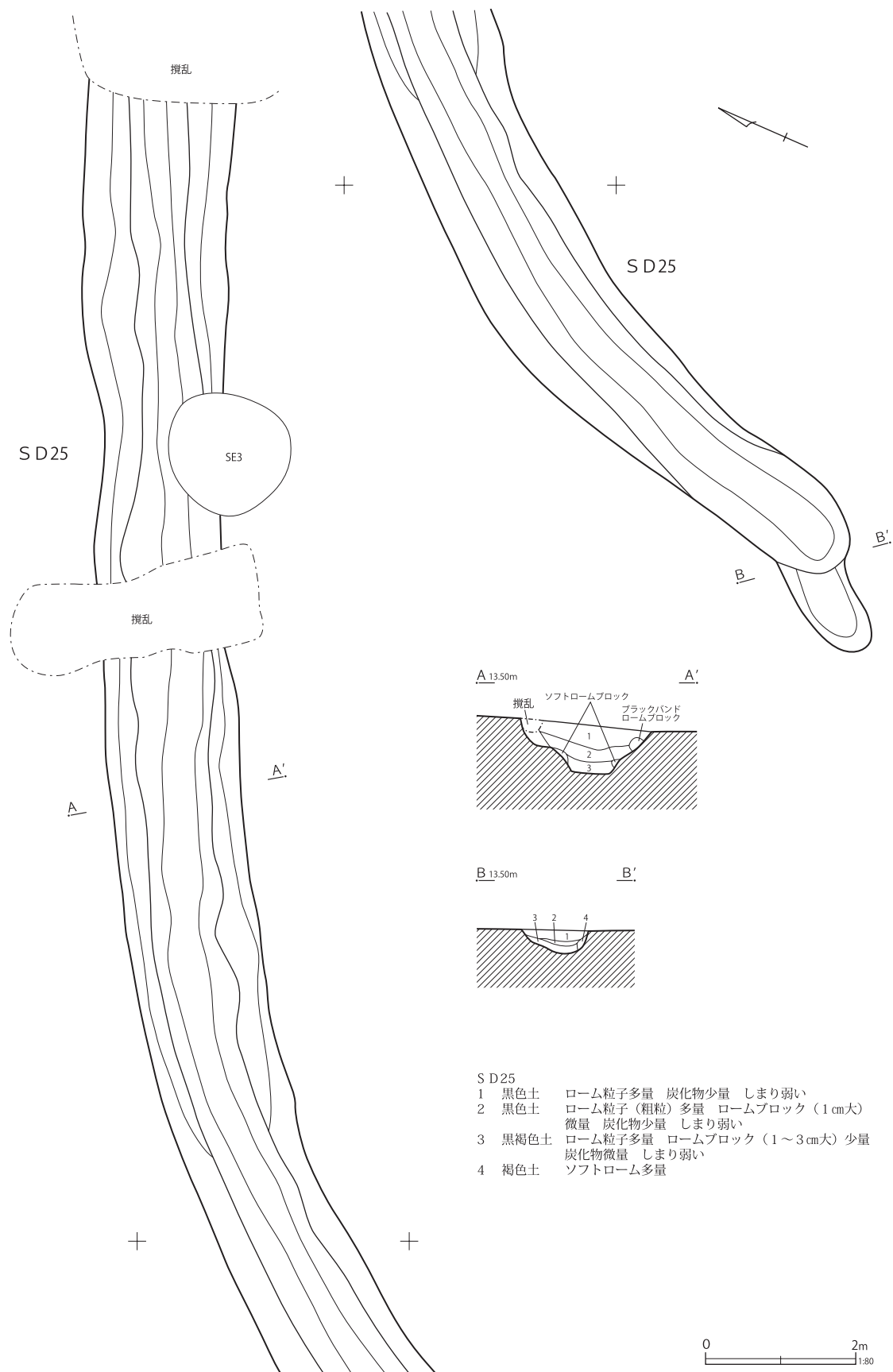
64～68に在地系土器を示した。64～67は焙烙である。67のみ土師質で、他は瓦質である。64と66の体部外面下位には指頭圧痕が認められるが、底部に近い部分(幅1cm程度)のみ強い工具でヨコナデが施される。65は補修孔が認められる瓦質土器である。胎土はやや軟質で黄色味を帯び、体部外面下位には強いヨコケズリが施さ

れる。68は薄手のかわらけで胎土は軟質である。

第606図77～90は出土した石製品であり、77・78が第20号溝跡、他は第18号溝跡の遺物である。84・85・87は縄文時代の石器が転用された砥石である。80・83は硯で、80は砥石に転用されている。88には櫛歯状工具痕と平ノミ状工具痕が認められ、平ノミ状工具痕は、再整形に伴う工具痕の可能性はある。



第 601 図 第 22 ～ 24 号溝跡



第 602 図 第 25 号溝跡

第100表 溝跡一覧表

番号	出土遺構	方位	長さ (m)	幅 (m)		深さ (m)		重複遺構
				最大	最小	最大	最小	
SD1	L-12・13 M-12・13	N-60°-E	14.44	5.15	2.72	0.99	0.59	SK9
SD2	M-12・13	N-62°-E	14.80	3.54	1.15	0.53	0.31	
SD3	M-13・14 N-12・13	N-78°-E	17.00	0.85	0.38	0.16	0.07	
SD4	N・0-13	N-41°-W	2.76	1.13	0.92	0.28	0.05	
SD5	0・P・Q-13	N-19°-W	15.12	1.76	0.60	0.18	0.05	SD10・11・12 SK41
SD6	N-14・15 0-13・14・15	N-72°-E	18.90	1.75	1.00	0.17	0.11	SJ1 SK7・8
SD7	P・Q・R・S-15	N-73°-E N-12°-W	41.72	2.33	1.00	0.38	0.06	SJ6 SD8・9
SD8	P-14・15 Q-12・13・14・15 R-15	N-71°-E N-15°-W	43.30	1.58	0.76	0.22	0.04	SD7 SK15・19・41
SD9	R-15・16 Q-15・16・17	N-76°-E	18.20	1.77	0.79	0.26	0.08	SJ3・4 SD7 SK40
SD10	Q-13	N-70°-E	3.38	0.34	0.26	0.10	0.07	SD5
SD11	Q-12・13	N-65°-E	8.65	0.55	0.30	0.21	0.06	SD5
SD12	Q-12・13	N-63°-E	8.64	0.39	0.27	0.17	0.06	SD5
SD13	Q-12・13	N-64°-E	8.20	0.40	0.22	0.11	0.05	
SD14	S・T-19	N-4°-W	1.87	0.50	0.42	0.29	0.24	
SD15	Q-13	N-71°-E	2.47	0.31	0.25	0.11	0.03	SK41
SD16	S-17・18	N-78°-E	10.16	0.52	0.33	0.11	0.04	
SD17	V19-21	N-103°-E	21.11	1.28	0.49	0.24	0.06	ST16.19.V19GP1
SD18	Q-14-19 W15-21	N-97°-E	68.45	2.77	1.05	101.30	0.63	SJ13.33.34.35.41.44.48.14
SD19	W-19・20	N-95°-E	7.53	1.12	0.53	0.16		SJ14・67 SD20
SD20	V14-16 W15-21	N-91°-E	61.20	0.88	0.37	0.99	0.66	SJ33.39.40.38.26.SD19.SD18
SD21	X・Y-16	N-36°-E	4.79	0.73	0.62	0.14	0.09	
SD22	AA-18・19	N-73°-E	2.78	0.76	0.58	0.11	0.06	SK155
SD23	Y-18・19 Z-18・19 AA-19	N-21°-W	37.15	2.36	0.96	0.58	0.24	SK167
SD24	AA-18・19	N-75°-E	3.35	0.44	0.30	0.08	0.03	
SD25	AA-21 AA-22・23 AB21	N-61°-E	25.12	1.98	0.71	0.74	0.07	SE3

第23号溝跡（第601・605図）

調査区南部に位置し、南北に延びる溝跡である。断面は逆台形状であり、深さは0.19～0.66 mである。第605図69は内外面に鉄釉が施された陶器の破片が用いられた転用砥具である。破断面4面が全て二次使用される。近世の所産と考えられる。

第24号溝跡（第601図）

調査区南部に位置する浅い溝跡で、断面は皿形を呈する。深さは0.03～0.08 mである。磁器爛徳利底部（19世紀中葉～後葉）、明石堺系陶器播鉢体部、瓦質土器焙烙底部が出土しており、19世紀中葉以降に位置付けられる。

第25号溝跡（第602・605図）

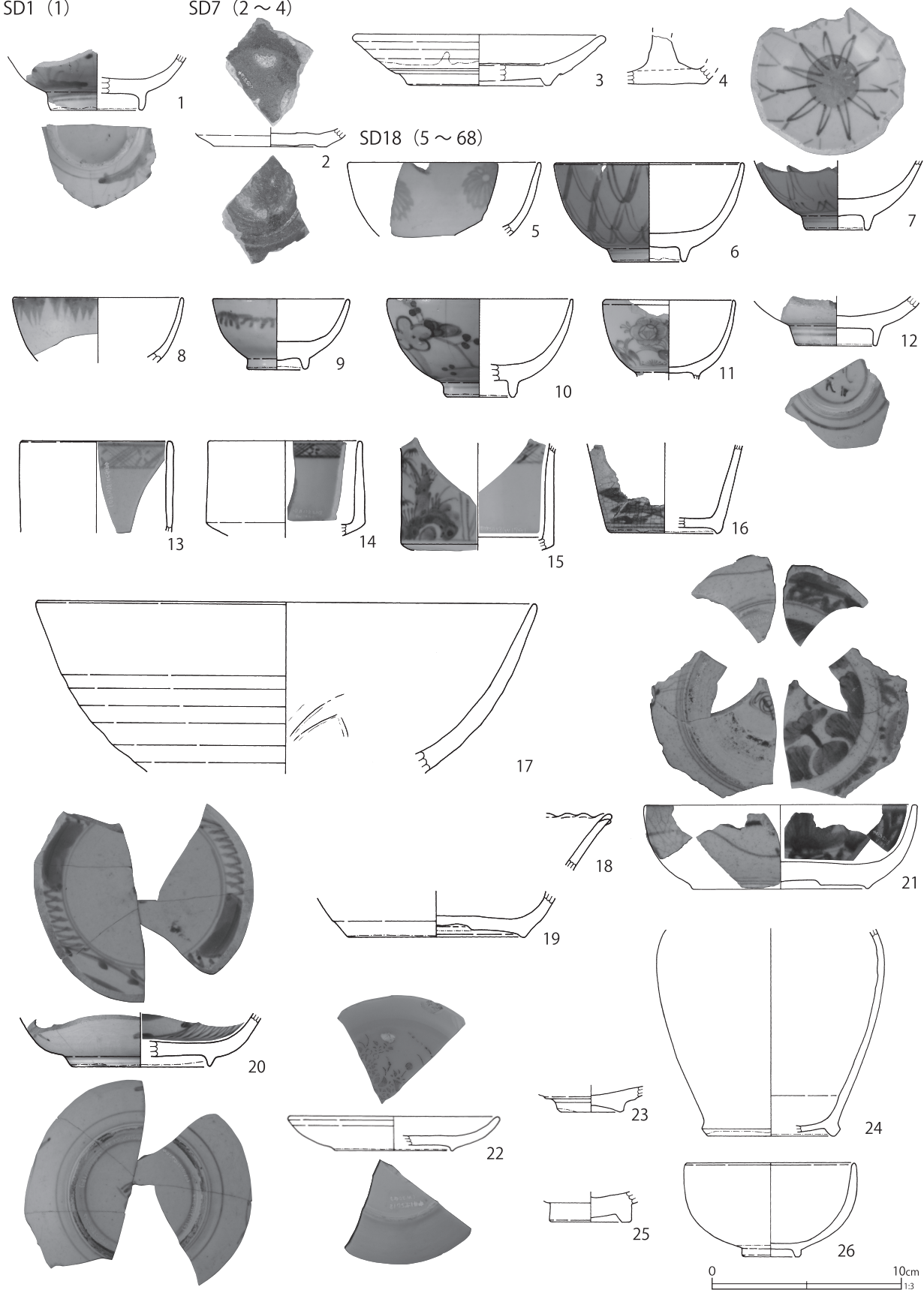
調査区南端部に位置し、AB-21グリッドから北東に向かって延びる。東部は攪乱によって壊され

ている。断面は逆台形状であり、覆土上層は人為堆積と考えられる。検出位置から、中世の地下式坑との関連も推測されるが、出土遺物は近世以降のものが主体である。

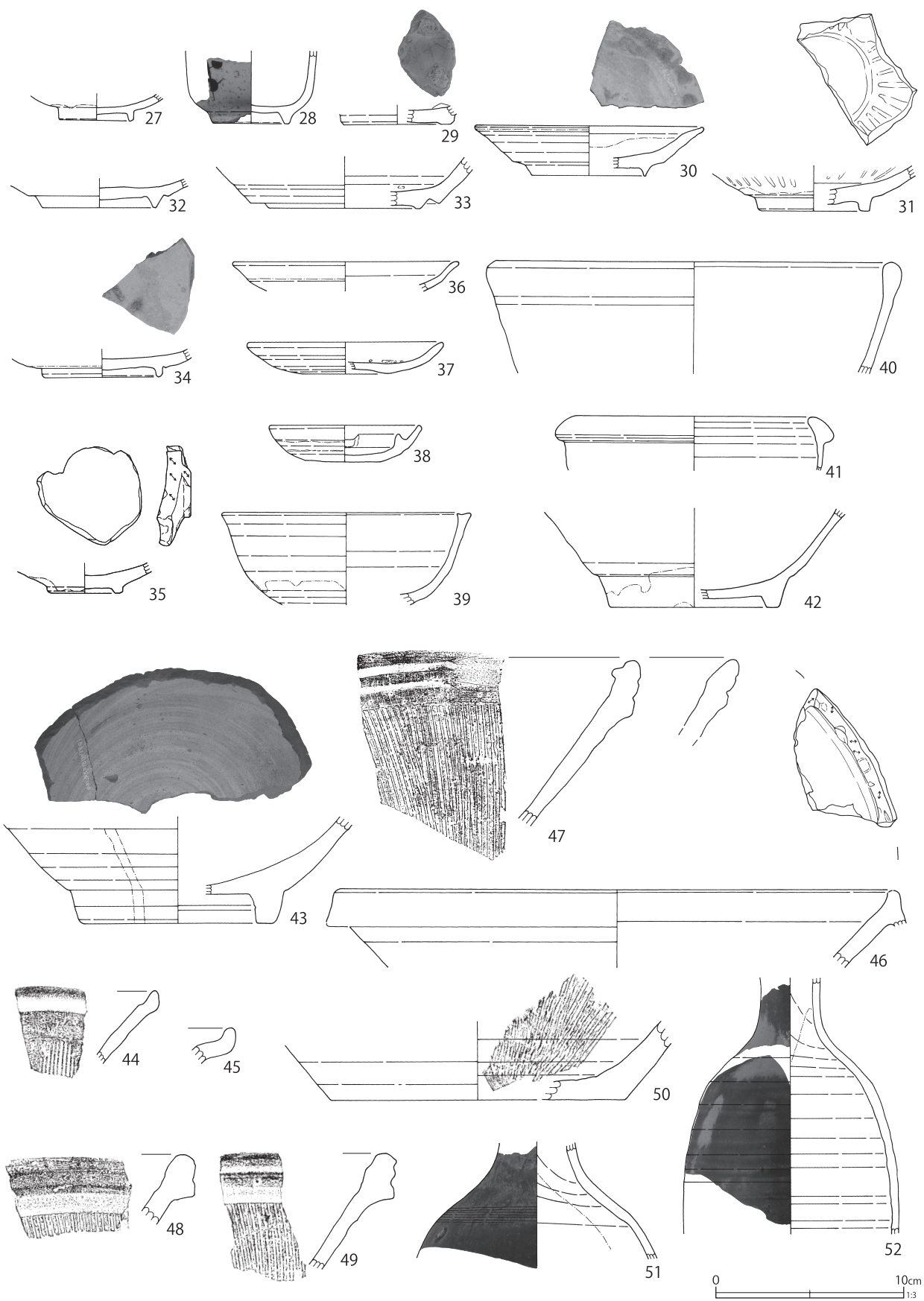
第605図70は肥前系磁器蓋で広東碗に伴うものである。18世紀後葉の所産である。71は瀬戸美濃系陶器香炉の底部破片である。厚手で瀬戸美濃系陶器石皿と同質の粗い胎土を有する。内面は褐色を呈しており、鉄化粧されている可能性がある。72は軟質のかわけで、胎土には細かな雲母が含まれる。図示した以外に、肥前磁器瓶類体部、地方窯系陶器土瓶底部、瓦質土器焙烙、土師質土器焙烙、軒棧瓦が出土している。軒棧瓦は丸瓦部の瓦当面が曲面状で、瓦当文様の無いタイプである。出土遺物から本跡は19世紀後葉に埋没したと考えられる。

SD1 (1)

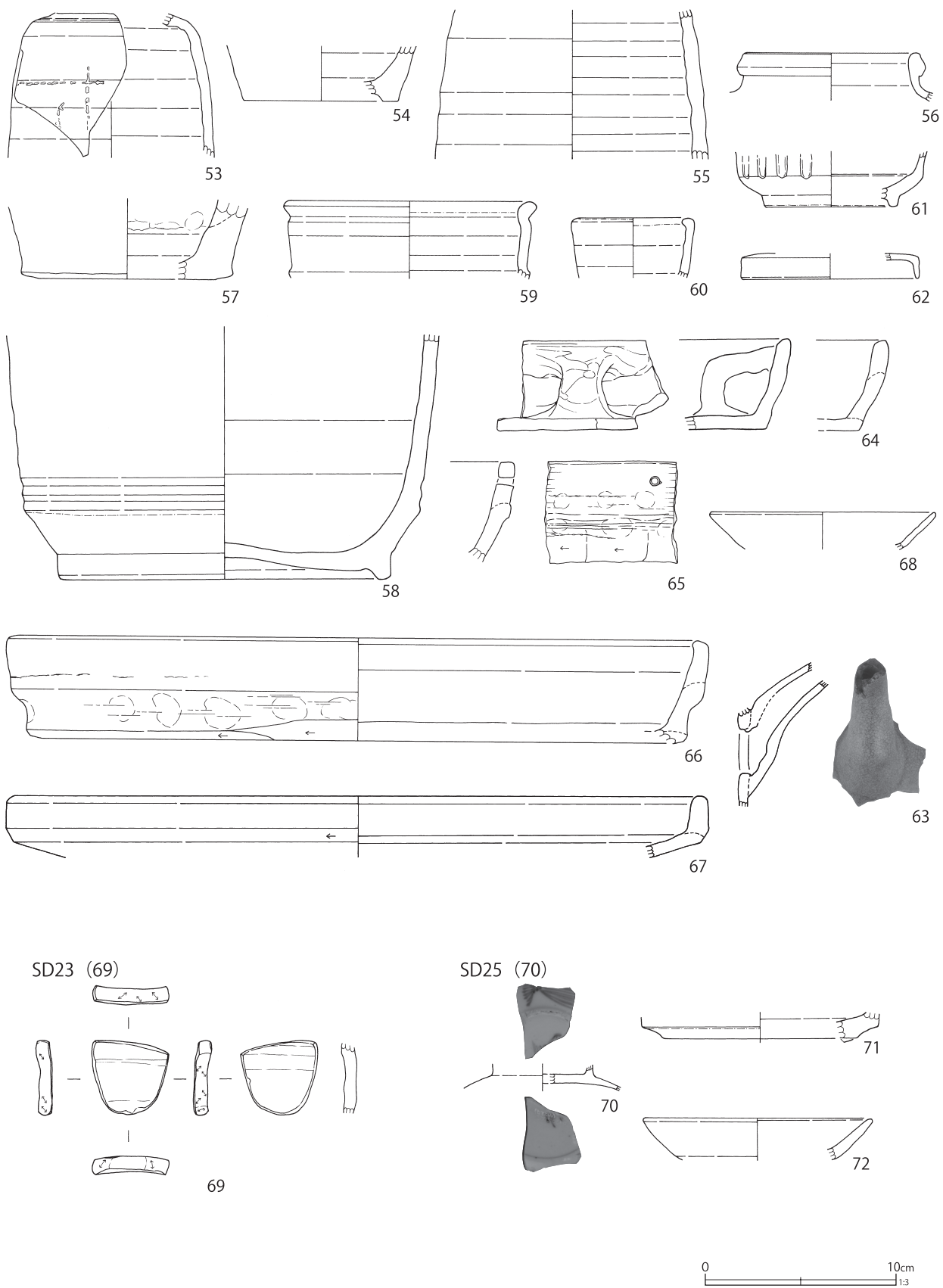
SD7 (2~4)



第 603 図 溝跡出土遺物 (1)



第 604 図 溝跡出土遺物 (2)



第 605 図 溝跡出土遺物 (3)



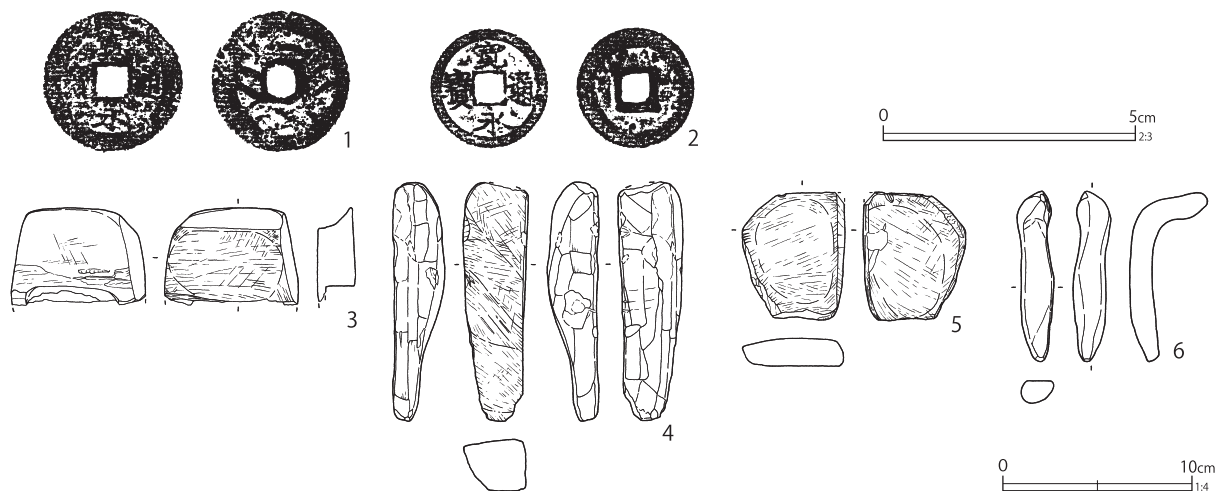
第 606 図 溝跡出土遺物（４）

第101表 溝跡出土遺物観察表

挿図	No.	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	出土位置	備考	図版
603	1	磁器	碗	—	[2.9]	(4.8)	—	30	良好	灰白	SD1	肥前系 内外面施釉 外面染付 高台置付露体部に砂付着 18C	191-1
603	2	陶器	稜皿	—	[1.1]	(6.0)	K	20	良好	灰白	SD7	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 内底面 目跡、高台内輪トチ痕 16C 中	
603	3	陶器	皿	(12.8)	2.6	(7.0)	I	20	良好	灰白	SD7	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内底面 直重ね焼き痕 17C 後～18C 前	
603	4	瓦質土器	焙烙	—	[2.6]	—	CHK	5	普通	黄灰	SD7	内面内耳貼付後ナゲ 体部外面煤 付着	191-2
603	5	磁器	碗	(9.9)	[3.8]	—	—	15	普通	白	SD18	肥前系 内外面施釉 外面染付け (コンニャク印判) 18C 前	
603	6	磁器	碗	(9.8)	5.1	3.8	—	30	良好	灰白	SD18	肥前系 内外面施釉 外面染付け (二重網目文) 18C 前	
603	7	磁器	碗	—	[3.6]	3.2	—	60	良好	白	SD18	肥前系 内外面施釉、染付け(二 重網目文、内底面コンニャク印判) 18C 前	191-3
603	8	磁器	碗	(8.9)	[3.3]	—	—	25	良好	灰白	SD18	肥前系 内外面施釉、染付 18C 前	
603	9	磁器	杯	7.1	3.7	3.0	—	90	良好	灰白	SD18	肥前系 内外面施釉 外面染付 18C 後～19C 前	
603	10	磁器	碗	(9.6)	[5.2]	(3.6)	—	20	普通	白	SD18	肥前系 内外面施釉 外面染付 18C	

挿図	No.	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	出土位置	備考	図版
603	11	磁器	碗	(9.6)	5.2	(3.6)	—	20	良好	白	SD18	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 19C 中	191-4
603	12	磁器	碗	—	(2.6)	(4.1)	—	25	良好	灰白	SD18	肥前系 内外面施釉 外面染付 (高台内銘款) 18C	
603	13	磁器	碗	(7.7)	[4.7]	—	—	10	良好	にぶい黄橙	SD18	肥前系 内外面施釉 (外面青磁釉) 内面染付 18C 後 (筒形碗)	
603	14	磁器	碗	(7.7)	[4.5]	—	—	10	良好	灰白	SD18	肥前系 内外面施釉、染付 18C 後 (筒形碗)	
603	15	磁器	碗	—	[5.6]	—	—	20	普通	白	SD18	肥前系 内外面施釉、染付 18C 後 (筒形碗)	
603	16	磁器	碗	—	[4.7]	(5.6)	—	30	良好	灰白	SD18	肥前系 内外面施釉、外面染付 被熱して破損 18C 後 (蕎麦猪口)	
603	17	磁器	鉢	(26.0)	[9.0]	—	—	40	良好	灰白	SD18	肥前系 内外面青磁釉 内面片切彫りで陰刻文様 17C 後～18C 前	191-6
603	18	磁器	鉢	—	[3.0]	—	—	5	良好	灰白	SD18	肥前系 内外面青磁釉 17C 後～18C	192-1
603	19	磁器	鉢	—	[2.4]	(9.2)	—	25	良好	灰白	SD18	肥前系 内外面青磁釉 蛇の目状高台 17C 後～18C	192-1
603	20	磁器	皿	—	[2.8]	(7.3)	—	30	良好	灰白	SD18	肥前系 内外面施釉、染付 被熱して煤付着 18C 後	191-5
603	21	磁器	皿	(14.1)	4.4	(9.2)	—	35	普通	白	SD18	肥前系 内外面施釉、染付 蛇の目状高台 被熱して煤付着 18C 後	
603	22	磁器	皿	(11.0)	1.8	(6.2)	—	20	良好	灰白	SD18	瀬戸美濃系 内外面施釉 (高台内除きクロム青磁釉) 内面上絵付け 19C 後	192-2
603	23	磁器	香炉	—	[1.3]	(3.1)	—	10	良好	灰白	SD18	肥前系 内面施釉 高台内と内面露胎	
603	24	磁器	壺	—	[10.8]	6.7	—	20	良好	白	SD18	肥前系 内外面施釉 高台量付露胎	192-3
603	25	陶器	天目茶碗	—	[1.6]	—	HI	10	普通	淡黄	SD18	瀬戸美濃系 内面鉄釉 17c 前	
603	26	陶器	碗	(8.8)	4.9	3.0	HK	60	良好	灰黄	SD18	京都信楽系 内外面灰釉 18C 中～後	192-4
604	27	陶器	碗	—	[1.4]	3.7	HK	20	普通	灰白	SD18	肥前系 内外面灰釉 18C 前 (平碗)	
604	28	陶器	碗	—	[3.8]	(4.0)	K	40	良好	灰黄	SD18	内外面施釉 上絵付け (茶、赤) 19C 後	192-5
604	29	陶器	碗	—	[1.1]	5.7	I	15	普通	灰白	SD18	瀬戸美濃系 内面灰釉、目跡 2 カ所遺存 底部糸切後削り出し 16C 後～17C 前 (丸碗)	
604	30	陶器	皿	(11.8)	2.6	(5.9)	K	20	良好	淡黄	SD18	瀬戸美濃系 内面銅緑釉 見込み鉄絵 17C 前 (志野織部鉄絵皿)	192-6
604	31	陶器	皿	—	[2.4]	(5.8)	K	40	良好	にぶい黄橙	SD18	瀬戸美濃系 内外面灰釉 17C 中～後	
604	32	陶器	皿	—	[1.5]	(6.0)	HIK	25	普通	淡黄	SD18	瀬戸美濃系 内面灰釉、直重ね焼き痕 17C 後～18C 前	192-7
604	33	陶器	皿	—	[2.7]	(8.0)	HIK	5	良好	灰黄	SD18	瀬戸美濃系 内外面灰釉、内底面ピン痕 17C 後	
604	34	陶器	皿	—	[1.5]	(6.0)	IK	20	良好	褐灰	SD18	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面摺絵 18C 中～後	192-8
604	35	陶器	皿	—	[1.6]	(3.7)	HI	50	普通	灰白	SD18	肥前系 内外面灰釉 破損後砥具として断面を二次利用 17C 前	
604	36	陶器	皿	(12.0)	[1.5]	—	K	10	良好	褐灰	SD18	内外面鉄釉 外面下位露体部煤付着	193-1
604	37	陶器	灯明皿	(10.2)	1.7	(4.4)	HIK	30	良好	褐灰	SD18	瀬戸美濃系 内外面鉄釉薄く施釉 外面底部拭き取り 内底面重ね焼き痕 18C 後～19C 前	
604	38	陶器	灯明皿	8.0	1.9	4.0	K	50	良好	浅黄	SD18	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 外面下位拭き取り、重ね焼き痕 18C 後～19C 初	193-2
604	39	陶器	片口鉢	(13.0)	[4.8]	—	HI	20	普通	浅黄	SD18	瀬戸美濃系 内外面灰釉 18C 後	
604	40	陶器	鉢	(20.8)	[5.8]	—	K	10	良好	灰黄	SD18	瀬戸美濃系 内外面灰釉 18C 中～後	193-3
604	41	陶器	鉢	(12.6)	[2.8]	—	HIK	10	良好	黄灰	SD18	内外面灰釉	
604	42	陶器	鉢	—	[5.2]	(8.9)	IK	20	良好	灰	SD18	瀬戸美濃系 内外面灰釉 18～19C	193-4
604	43	陶器	鉢	—	[5.6]	(10.0)	E	40	良好	にぶい赤褐	SD18	肥前系 内面施釉 (刷毛目状) 17C 中～後	
604	44	陶器	播鉢	—	[3.8]	—	HIK	5	良好	にぶい黄橙	SD18	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 内面摺目 17C 後～18C 前	193-5
604	45	陶器	播鉢	—	[2.3]	—	IK	5	普通	にぶい黄	SD18	瀬戸美濃系 内外面鉄釉	

挿図	No.	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	出土位置	備考	図版
604	46	陶器	播鉢	(29.2)	[4.1]	—	IK	10	普通	灰白	SD18	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 口唇部 砥具として二次利用 16C 中～後	193-2
604	47	陶器	播鉢	—	[8.1]	—	IK	5	良好	にぶい赤褐	SD18	明石堺系 内面摺目（一単位 11 本） 18C 中	
604	48	陶器	播鉢	—	[3.7]	—	EK	5	良好	赤褐	SD18	内外面鉄釉 内面摺目	
604	49	陶器	播鉢	—	[6.2]	—	HI	5	良好	赤褐	SD18	内外面鉄釉 内面摺目	193-3
604	50	陶器	播鉢	—	[4.1]	(15.6)	IK	10	良好	赤褐	SD18	明石堺系 内面摺目（一単位 11 本） 外面ヨコナデ 18～19C	193-4
604	51	陶器	徳利	—	[6.3]	—	IK	40	良好	灰黄	SD18	瀬戸美濃系 外面灰釉（飴釉、一 部ウノフ釉） 18C 前～中	
604	52	陶器	徳利	—	[13.5]	—	IK	50	良好	黄灰	SD18	瀬戸美濃系 外面灰釉（飴釉、一 部ウノフ釉） 18C 前～中	
605	53	陶器	徳利	—	[7.2]	—	I	20	普通	灰白	SD18	瀬戸美濃系 外面灰釉、釘書きあ り 18C 後～19C 初	193-5
605	54	陶器	徳利	—	[2.8]	(8.0)	HIK	10	普通	にぶい黄橙	SD18	瀬戸美濃系 外面灰釉 18C 前～ 中	
605	55	陶器	徳利	—	[7.7]	—	IK	20	良好	にぶい黄橙	SD18	志戸呂系 外面鉄釉 17C 後～18C 前	
605	56	陶器	壺	(8.8)	[2.5]	—	GIK	10	良好	灰白	SD18	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 17C 後	193-7
605	57	陶器	半胴甕	—	[12.8]	16.5	I	50	良好	にぶい橙	SD18	瀬戸美濃系 内外面鉄釉（柿釉） 外面下位露胎 18C 後	
605	58	陶器	壺	—	[4.2]	(9.3)	EIK	20	普通	にぶい赤褐	SD18	常滑 内外面ナデ、底部砂目 16 ～17C	
605	59	陶器	香炉	(12.4)	[4.0]	—	IK	10	普通	灰白	SD18	瀬戸美濃系 外面鉄釉 17C 中～ 後	193-6
605	60	陶器	香炉	(5.7)	[2.9]	—	—	20	良好	にぶい赤褐	SD18	瀬戸美濃系か 内外面薄く鉄釉 口縁部露胎 17C	
605	61	陶器	香炉	—	[2.9]	(6.8)	K	25	良好	にぶい黄橙	SD18	瀬戸美濃系 外面鉄釉、しのぎ文 内面露胎 18C	
605	62	陶器	蓋	(9.1)	[1.3]	—	—	15	良好	灰白	SD18	京都信楽系 内外面灰釉	193-7
605	63	陶器	土瓶	—	[7.7]	—	HI	15	普通	灰白	SD18	京都信楽系か 灰釉施釉 注口部 破断面に煤付着 18C 後	
605	64	瓦質土器	焙烙	—	4.6	—	CHIK	5	良好	黄灰	SD18	内外面ヨコナデ、外面下位横工具 ナデ	
605	65	瓦質土器	焙烙	—	[5.2]	—	CHIK	5	普通	灰黄褐	SD18	内外面強いヨコナデ 外面下位工 具ナデ 体部二次穿孔 外面煤付 着	193-6
605	66	瓦質土器	焙烙	(35.4)	5.3	(34.0)	CEHIK	15	普通	黄橙	SD18	内外面ヨコナデ 外面下位指頭圧 痕をナデ消し、下端工具ナデ 外 面煤付着	193-6
605	67	土師質土器	焙烙	(35.4)	[3.2]	(35.8)	CIK	15	良好	浅黄	SD18	内外面ヨコナデ 底部シワ状痕	
605	68	かわらけ	小皿	(11.6)	[1.9]	—	H	10	普通	にぶい黄橙	SD18	内外面ヨコナデ 胎土粉質	
605	69	陶器	不詳	—	[3.7]	—	K	5	普通	にぶい黄橙	SD23	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 破損面 を砥具として二次利用	193-7
605	70	磁器	蓋	—	[1.4]	—	—	10	良好	白	SD25	肥前系 内外面施釉、染付 18C 後	
605	71	陶器	香炉	—	[1.3]	(10.0)	EHIK	10	良好	灰黄	SD25	瀬戸美濃系 外面鉄釉 底部に脚 の一部遺存 18C 後～19C 前	
605	72	かわらけ	小皿	(11.8)	[2.1]	—	ACHK	10	普通	にぶい橙	SD25	内外面ヨコナデ 胎土粉質	



第 607 図 グリッド出土遺物（中・近世）

第102表 出土石製品観察表

挿図	番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	岩石種	備考	図版
590	9	SK274	砥石		4.0	3.2	150.0	砂岩	平面長方形 断面隅丸長方形 刃物痕表2条 敲石からの転用	
590	10	SK274	砥石		3.9	2.1	62.6	流紋岩	表と側縁部幅広の工具痕 平面長方形 断面長 方形 上下端部欠損	
606	73	SD 7	砥石		5.1	1.5	79.1	砂岩	平面長方形 断面長方形 2面使用 硬質の砂 岩を利用 欠損あり	194-1
606	74	SD 7	砥石		2.8	0.8	20.3	緑泥片岩	平面不整形 断面不整形 刃物痕多数(表裏) 3面使用 不定形砥石 欠損あり	194-1
606	75	SD 7・8	砥石	5.5	3.6	3.0	56.3	ホルンフェルス	平面不整形 断面不整形 刃物痕多数(表裏・ 側縁部) 後世の傷と区別難しい 3面使用 不定形砥石 石器転用か 完形	194-1
606	76	SD 9	砥石	5.1		0.8	8.5	安山岩	平面不整形 断面不整形 表・裏面・側面使用 全体に擦痕あり	194-1
606	77	SD20	砥石			2.9	275.3	緑泥片岩	平面不整形 断面不整形 3面使用 欠損あり 被熱あり 黒色化	194-1
606	78	SD20	砥石		7.5		213.7	安山岩	平面楕円形 断面楕円形 刃物痕表5条 3面 使用 磨石転用 上下端部2/3欠損	194-1
606	79	SD18	砥石		4.2	1.6	56.0	粘板岩	平面長方形 断面長方形 刃物痕裏数条 5面 使用 欠損あり	194-1
606	80	SD18	硯	4.6		0.8	26.1	粘板岩	平面長方形 断面長方形 刃物痕多数(表裏・ 側縁部・破損面) 裏面文字線刻 砥石に転用 5面使用 欠損あり	194-1
606	81	SD18	砥石	4.5		1.0	22.8	粘板岩	平面不整形 断面不整形 刃物痕1条(表) 4面使用 欠損あり	194-1
606	82	SD18	砥石	5.5	3.8	1.3	31.9	粘板岩	平面長方形 断面三角形 刃物痕2条(側縁部) 5面使用 完形 被熱あり	194-1
606	83	SD18	硯				54.0	粘板岩か	平面長方形 表面中央から溝状にえぐれる 断 面長方形 欠損あり	194-1
606	84	SD18	砥石				107.8	黒色安山岩	平面円形 断面楕円形 刃物痕多数(表裏・側 縁部) 4面使用 磨石を転用 欠損あり	194-1
606	85	SD18	砥石	7.1	7.1	3.2	115.9	安山岩	平面不整形 断面長方形 刃物痕多数(裏) 3面使用 磨石転用か 完形	194-1
606	86	SD18	砥石		4.6	4.1	229.5	流紋岩	平面長方形 断面不整形 刃物痕数条(側縁 部) 4面使用 完形 一部被熱、黒色化	194-1
606	87	SD18	砥石	8.3	4.0	2.2	113.8	砂岩	平面楕円形 断面楕円形 刃物痕多数(表裏・ 側縁部) 4面使用 欠損あり	194-1
606	88	SD18	砥石	7.7	2.0	1.9	38.9	流紋岩	側縁部整形 櫛歯状工具痕と平ノミ状工具痕の いずれも認められる。平ノミ状工具は、再整形 時に用いられた可能性がある。3面使用 完形	194-1
606	89	SD18	砥石	8.0	2.2	2.1	46.6	流紋岩	平面棒状 断面三角形 刃物痕2条(表裏) 3 面使用 完形 よく使いこまれている。	194-1
606	90	SD18	砥石	6.0	2.3	1.7	26.7	流紋岩	平面棒状 断面三角形 刃物痕3条(表) 4面 使用 完形 一部被熱、黒色化 煤付着 よく 使いこまれている。	194-1
607	3	Z-20	砥石	5.1	7.1	2.1	64.1	粘板岩	平面長方形 断面長方形 破損後、転用砥石 (破損面裏面) 欠損あり	194-1
607	4	AC-21	砥石	12.6	3.4	2.8	131.3	流紋岩	平ノミ痕 平面長方形 断面台形 刃物痕1条 (表) 1面使用 完形	194-1
607	5	Y-17	砥具	6.8	5.4	1.5	57.6	—	平面不整形 断面長方形 刃物痕数条(側縁 部) 5面使用 平瓦転用 完形	194-1
607	6	U-17	砥石か	9.0	2.0	4.1	37.0	不明	平面棒状 断面L字状 使用面不明 完形	194-1

第103表 出土鉄製品観察表

挿図	番号	出土位置	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	図版
577	11	S J 26	鉄製品	延板状品	[3.6]	1.7	0.1	4.3		194-1
590	3	S K 271	鉄製品	火打金	[4.1]	1.4	0.2	11.8		194-1

第104表 出土銭貨観察表

挿図	番号	出土位置	器種	径	厚さ	重量	備考	図版
607	1	表採	銭貨	2.8	0.1	4.8	寛永通宝(波銭)	194-1
607	2	W-19	銭貨	2.4	0.1	2.3	寛永通宝	194-1

(4) グリッド出土遺物(第607図)

3は硯の破片である。破損面の一部と裏面が砥石として転用されている。4は砥石で裏面と両側縁に成形時の平ノミ状工具痕が明瞭である。

5は瓦の破片が転用された砥具で、近世以降の所産である。6は不定形の石製品で、擦痕は明確では無いが、砥石として用いられた可能性がある。

V 調査のまとめ

(1) 調査の成果

中井遺跡は、西流する江川に張り出す狭い台地上の突端部に立地している。

遺跡では2次にわたる調査によって、縄文・古墳・奈良時代、中・近世の遺構と遺物が検出された。

縄文時代の遺構として、住居跡は前期後葉1軒、中期78軒、後期初頭1軒、後期前葉1軒が検出された。他に埋甕4基、集石土壌3基、土壌245基が見つかった。

調査区の約150m北側は江川が西流し、南端は斜面となっている。遺跡はその間の台地平端部を利用して立地している。中期の住居跡の分布は、調査区の南半から帯状に密集していた。この時期の集落は環状に形成されることが多く、検出された住居はその一部と考えられる。集落域の北側を江川に向かって傾斜する手前までと想定すると、径200mにも及ぶ大規模な集落と推定できる。今回の調査区が全体の3分の1程度とすれば、住居数は200軒を超えるものと予想される。また、住

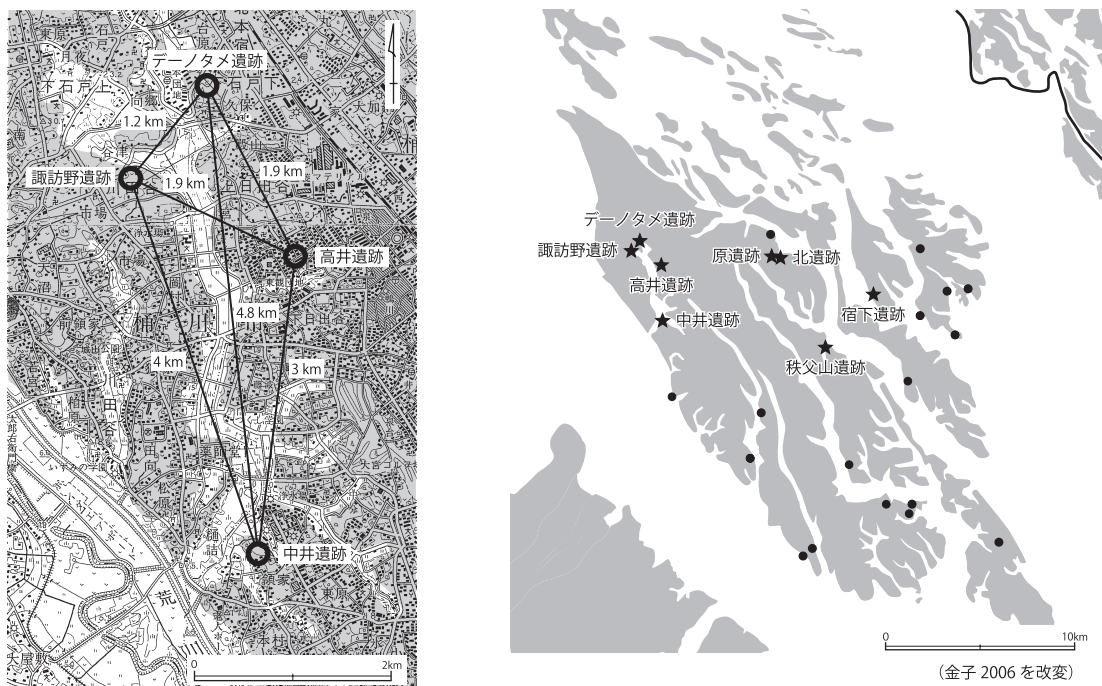
居跡の多くに建て替えの痕跡が認められることから、総数はさらに増えると考えられる。

このような大規模な環状集落は、地域において拠点的な存在で、一定の領域を持って営まれていたと考えられている。

ところが、中井遺跡が面する江川流域では、同規模と想定される大規模集落が4～5kmの範囲内に分布することが、近年の調査で明らかになってきた（第608図左側）。江川の上流から北本市デーノタメ遺跡・桶川市諏訪野遺跡・桶川市高井遺跡がそれに当たる。遺跡は湧水や低湿地などの自然環境に恵まれており、それらを背景に集落が営まれていたと考えられる。一見すると密集する集落間には一定の領域がないように見える。

しかしながら、4遺跡の背後には遺跡がない空白域があることがわかる（第608図右側）。それから考えれば、4つの遺跡はそれぞれその空白域を一定の領域として持っていたことが推察される。

江川流域は、交通の便や、生活に最適で、各集落への入口部に適していたものと考えられる。そ



第 608 図 江川流域の中期集落と大宮大地における加曽利 E I 式後半における集落

の地域をお互いに分かち合いながら、その背景に広がる地域を領域にしていたと考えられる。

遺跡が立地する大宮台地は、小河川による谷で区切られた支台が複数存在している。それらの地形を分析すれば、4つの遺跡の領域が推定できると考えられるが、今後の課題である。

このような江川流域における集落の立地と領域のあり方が、荒川低地を挟んだ西側の武蔵野台地では見られないことから、中期集落の様相を知る上で、貴重な成果を得ることが出来たと言える。

古墳時代の遺構は、調査区の北側から住居跡が2軒検出された。いずれも7世紀前葉で、短期間に営まれた小規模な集落であったと考えられる。

奈良時代の遺構は、住居跡が6軒検出された。調査区の南半に分布していた。遺物から8世紀中葉から後葉に相当する。同時期の住居跡は、同じ台地上の南側に隣接する石神遺跡、石神Ⅲ遺跡からも検出されている（第616図）。

古墳時代後期から奈良・平安時代の集落跡は、谷を挟んだ西側の台地上に位置する領家・宮下遺跡が知られている。中井遺跡が立地する台地上では、限定された時期に住居跡が集中しているのに対し、領家・宮下遺跡では長期間にわたって遺跡が存続し、相違する集落のあり方が注目される。

中・近世の遺構は、井戸跡3基・土壇42基・溝跡25条を検出した。井戸跡や土壇は調査区南端部に集中している。溝跡は調査区全体に展開し、北側では土地を矩形に区画している状況が認められた。調査区の北側は、ヤドロの堆積が多く見られており、畑地として土地利用がされたと考えられる。建物跡は検出されなかったが、井戸跡や土壇が集中する南側に居住域があったと考えられる。

（2）縄文時代中期土器の変遷（第609～611図）

中井遺跡は主に縄文時代中期中葉から末葉、勝坂式期から加曽利E式期の集落である。ここでは、住居跡出土の土器群を主に対象としてその変遷を捉え、以下の第Ⅰ期から第Ⅻ期に分類した。

第Ⅰ期 勝坂式初頭

第Ⅱ期 勝坂式古段階

第Ⅲ期 勝坂式中段階

第Ⅳ期 勝坂式新段階

第Ⅴ期 勝坂式終末

第Ⅵ期 加曽利EⅠ式前半

第Ⅶ期 加曽利EⅠ式後半

第Ⅷ期 加曽利EⅡ式前半

第Ⅸ期 加曽利EⅡ式後半

第Ⅹ期 加曽利EⅢ式前半

第Ⅺ期 加曽利EⅢ式後半

第Ⅻ期 加曽利EⅣ式

分類した各期について述べていくこととする。

第Ⅰ期（第609図1・2）

文様の区画内を、細かい角押文が列状に施文される。井戸尻編年の貉沢式に相当する。この期に相当する遺構はなかったが、他の時期の遺構、遺物に混入して出土している。

第Ⅱ期（第609図3～10）

ペン先状工具によって三角押文が施文される。井戸尻編年の新道式に相当する。住居跡はなかったが、土壇が3基検出された。

第Ⅲ期（第610図11～14）

隆帯脇にキャタピラ状爪形文と、それに沿って角押文や小波状沈線文が施文される。井戸尻編年の藤内Ⅰ式に相当する。

第Ⅳ期（第610図15～29）

隆帯脇に沈線が施文され、その沈線に沿って爪形文や蓮華文などが施文される。また、区画内に沈線が充填される土器が出現する。井戸尻編年の藤内Ⅱ式から井戸尻Ⅰ式に相当する。

第Ⅴ期（第610図30～45）

隆帯脇に沈線が施文され、隆帯上に刻みが施される勝坂式系の土器を主体とする。44はいわゆる褶曲文土器である。井戸尻編年の井戸尻Ⅱ式に相当する。中峠式系の土器が含まれる。勝坂式終末の土器群で、加曽利EⅠ式初頭に並行する土器

も含まれると考えられる。

第Ⅵ期（第 610 図 46～70）

キャリパー形土器が出現する時期である。横 S 字状文などが施文される口縁部文様帯を持つ土器が出現し、地文に撚糸文を持つ土器が主体を占める。加曽利 E I 式前半とした。文様が簡略化された勝坂式系の土器や、中峠式系の土器が含まれる。

第Ⅶ期（第 611 図 71～82）

口縁部文様帯と連結する大型の橋状把手を持つ土器が多く出現する。頸部が無文帯となる土器が主体である。加曽利 E I 式後半とした。

第Ⅷ期（第 611 図 83～93）

口縁部文様帯が狭くなり、胴部が長胴化する土器が主体となる。口縁部に繋弧文が施文されるものが多い。92・93は住居跡に伴わない土器であるが、この時期の土器全体を残すものが少なく、ここに含めた。文様が確立された連弧文土器は出土しない。加曽利 E II 式前半とした。

第Ⅸ期（第 611 図 94～108）

連弧文土器が出現し盛行する。104・105を出土した第85号住居跡のように連弧文土器が主体を占める住居跡も出現する。頸部が無文とならないキャリパー形土器が多くなる。第24号住居跡は連弧文土器の盛行期で、出現期である第74号住居跡と分類すべきであるが、明確ではないため加曽利 E II 式後半として呈示した。

第Ⅹ期（第 611 図 109～113）

磨消縄文が出現する。キャリパー形の器形が崩れ、口縁部文様帯の隆帯に沿う沈線が幅広でなぞり返されるようになる。連弧文土器は残存するが、

110のように文様が磨消縄文となる。加曽利 E III 式前半とした。

第Ⅺ期（第 611 図 114～116）

吉井城山類の出現以降で、口縁部文様帯を持たない土器が主体となる。115は大木式系の土器である。加曽利 E III 式後半とした。

第Ⅻ期（第 611 図 117・118）

加曽利 E IV 式とした時期で、117は古い段階で、118は新しい様相を持っている。該当する住居跡はなく、117は単独の埋甕としたものである。

（3）縄文時代の住居跡変遷（第 612・613 図）

前項において分類した第 I～Ⅻ期をもとに、住居跡の変遷について考えていくこととする。第 I・II 期に相当する住居跡はなく、第Ⅲ期以降について考えていく。

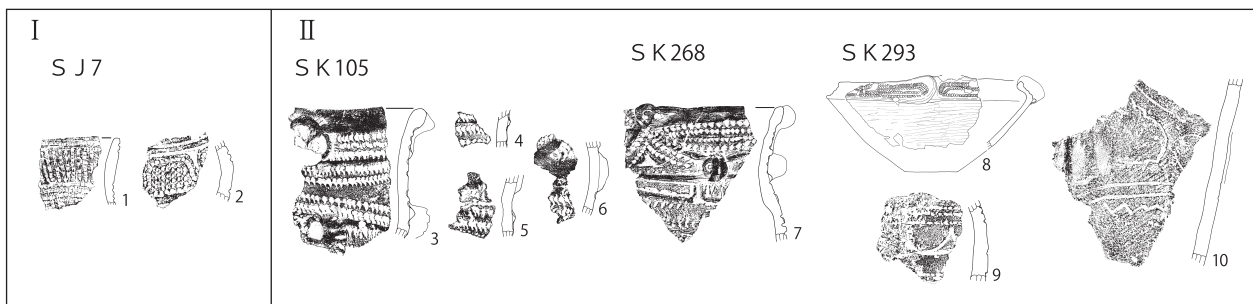
住居跡については、廃絶後に土器敷状の遺構や、土器の埋設を行っている住居跡も多い。そのため、時期については炉体土器や出入り口部に設置された埋甕に使用された土器を中心に分類した。不明確なものについては分類を行っていない。

第Ⅲ期（第 612 図）

集落の開始期である。第55号住居跡 1 軒がこの時期にあたる。大宮台地では、大規模環状集落がこの期から始まるものが多い。諏訪野遺跡や大宮台地東側の北遺跡・原遺跡もほぼこの期から住居を造り始める。

第Ⅳ期（第 612 図）

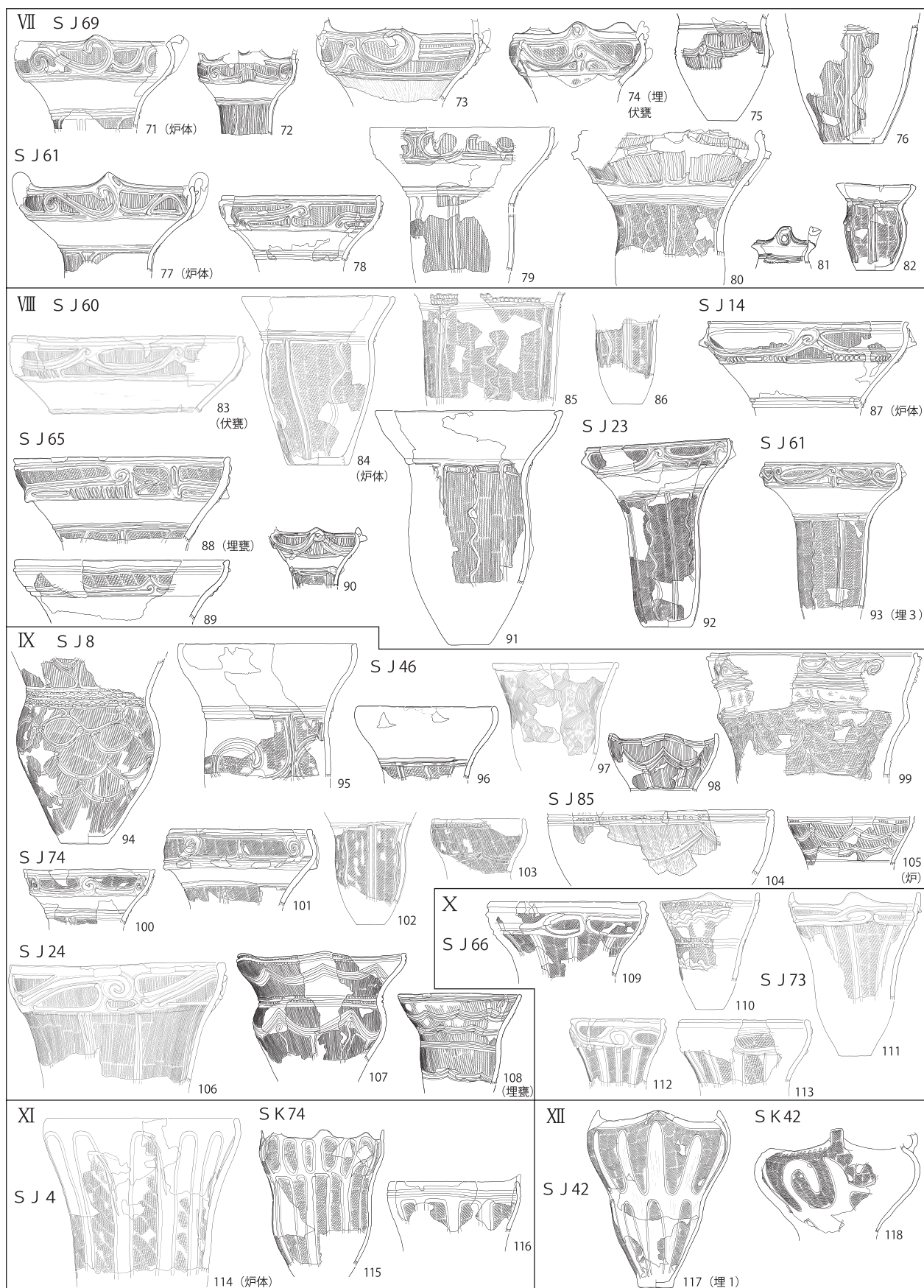
第32・35・37・38・51号住居跡の 5 軒がこの時期にあたる。西側と東側に分布のまとまりが見られる。住居跡の壁は斜めに立ち上がり、摺鉢状



第 609 図 出土中期土器変遷図（1）

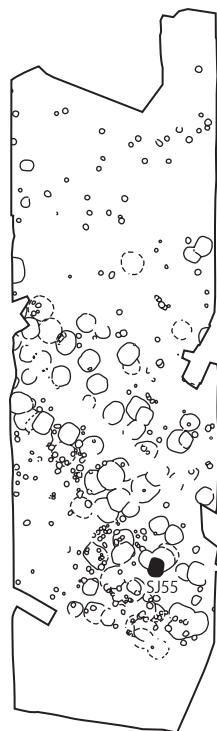


第 610 图 出土中期土器变遷图 (2)

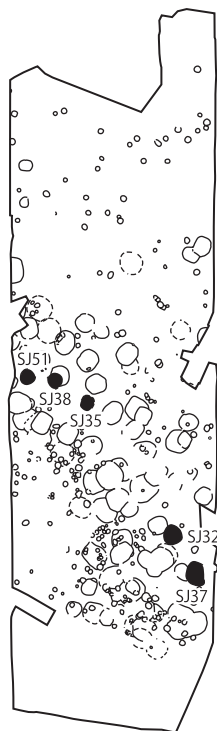


第 611 图 出土中期土器变遷图 (3)

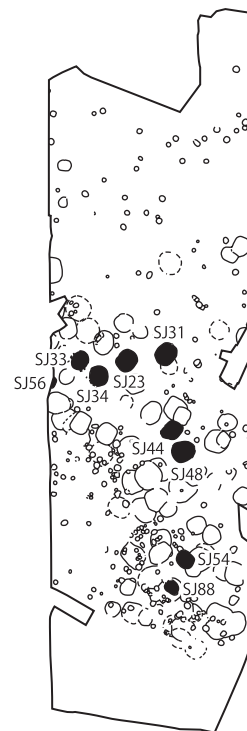
第Ⅲ期



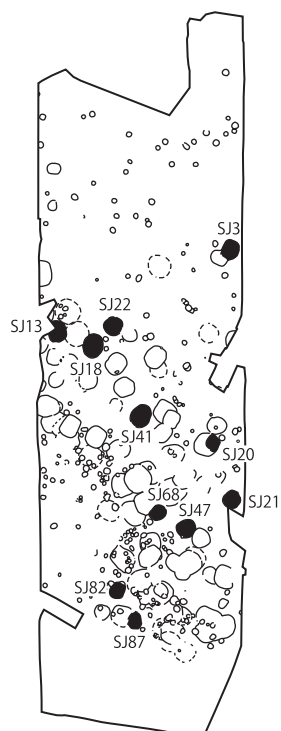
第Ⅳ期



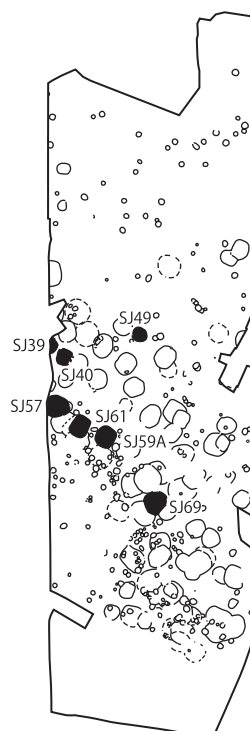
第Ⅴ期



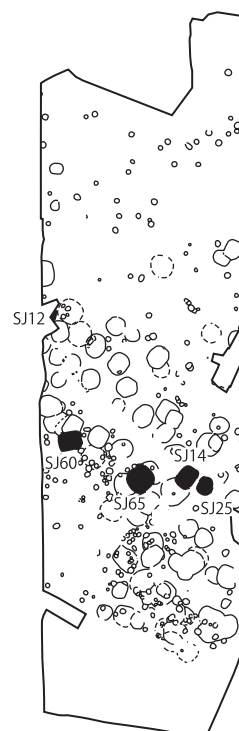
第Ⅵ期



第Ⅶ期

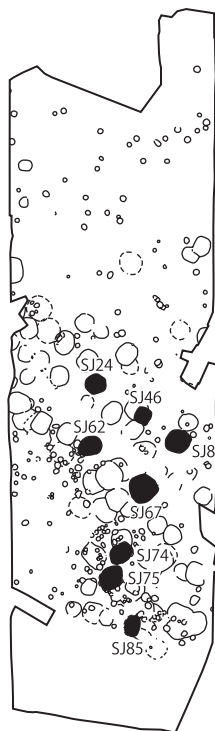


第Ⅷ期

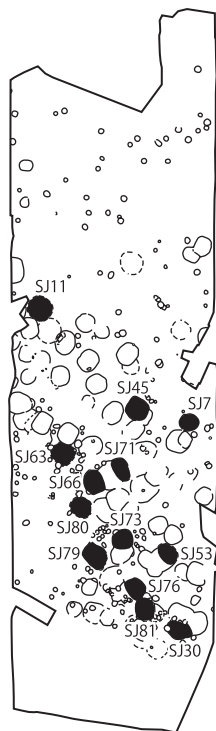


第 612 図 遺構変遷図 (1)

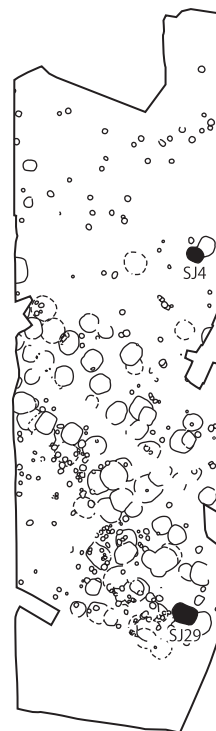
第IX期



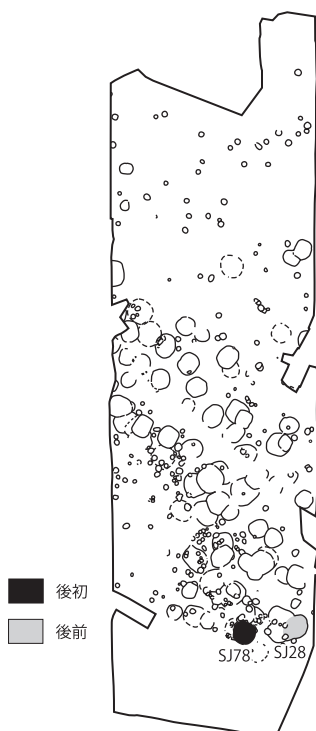
第X期



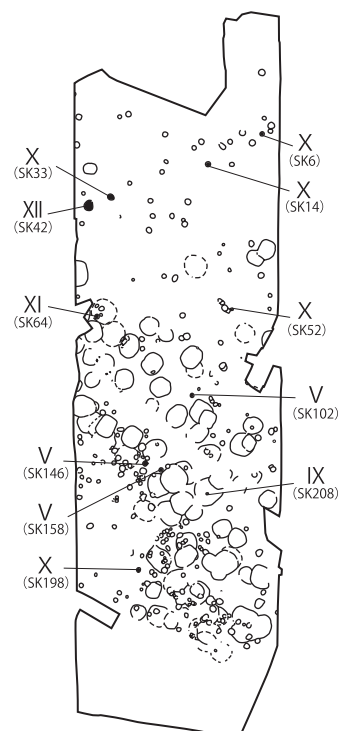
第XI期



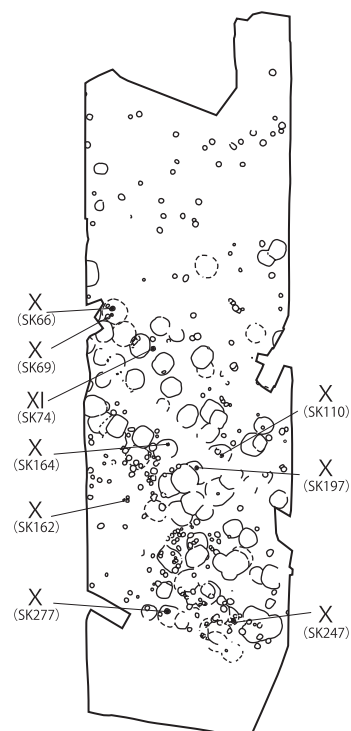
後期



土壇内单体土器埋設



土壇内土器敷



第 613 図 遺構変遷図 (2)・土壇内单体土器埋設・土壇内土器敷

となっている。第35・38・51号住居跡など比較的小型の住居跡が多い。

第Ⅴ期（第612図）

第23・31・33・34・44・48・54・56・88号住居跡の9軒がこの時期にあたる。住居の分布は内側に広がっている。深く播鉢状に掘り込まれた住居跡が多くを占めている。

第Ⅵ期（第612図）

第3・13・18・20・21・22・41・47・68・82・87号住居跡の11軒がこの時期にあたる。第3号住居跡は住居の分布域から外れた場所に位置している。第13・47号住居跡からは壁周溝が検出された。第20号住居跡はごく小型のものであった。第41号住居跡など、第Ⅴ期と同様の播鉢状の深い住居跡も多く見られる。第Ⅳ期から第Ⅵ期までの住居跡の形状は、播鉢状のものが多く大きな変化は見られない。

第Ⅶ期（第612図）

第39・40・49・57・59A・61・69号住居跡の7軒がこの時期にあたる。隅丸方形で、壁周溝が巡る定型的な住居跡が多く検出される。一定の距離を置いて帯状に分布しており、企画性の高い住居跡の配置が見られる。

第Ⅷ期（第612図）

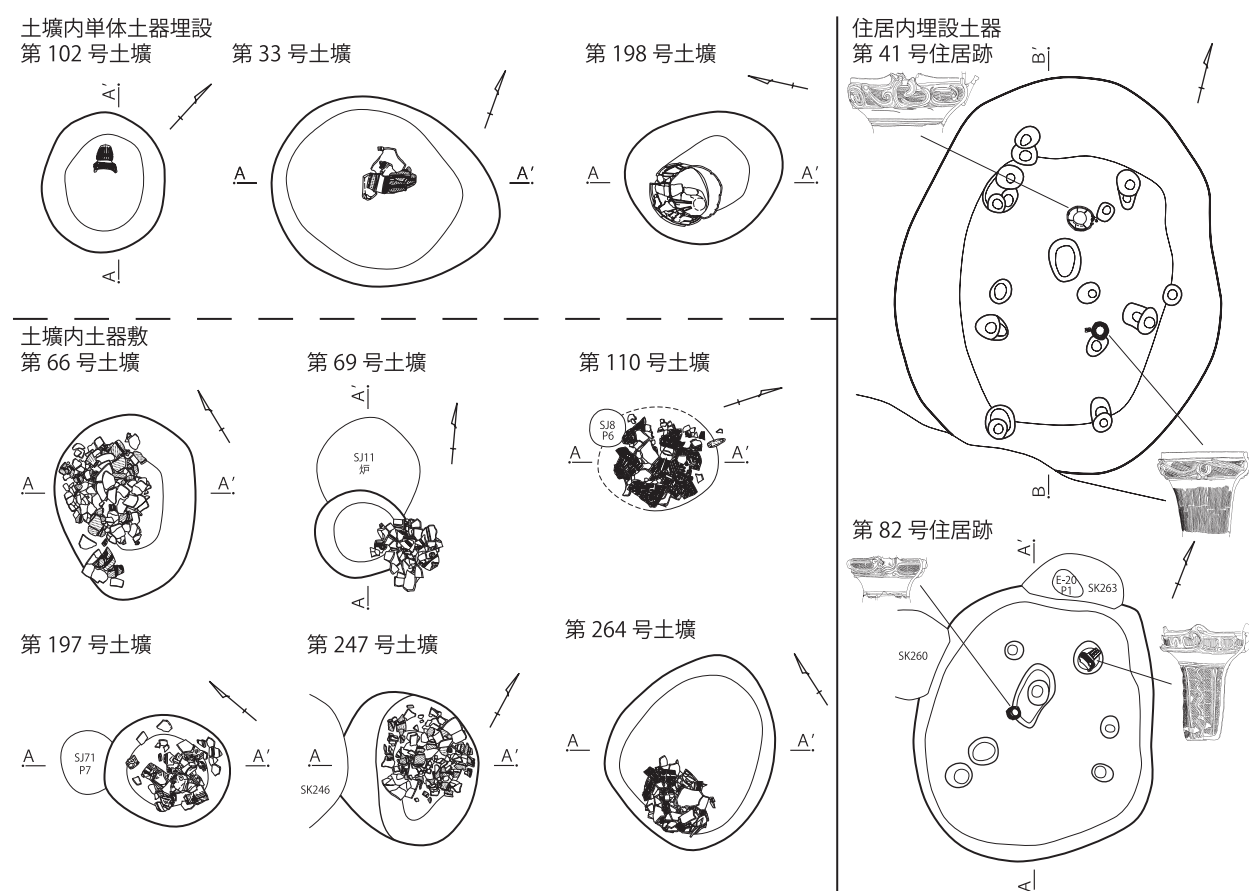
第12・14・25・60・65号住居跡の5軒がこの時期にあたる。第Ⅶ期と同様に定型的な住居跡が多く、分布も同様である。

第Ⅸ期（第613図）

第8・24・46・62・67・74・75・85号住居跡の8軒がこの時期にあたる。隅丸方形の定型的な住居跡は少なくなっている。第74号住居跡は出入口側の壁がやや突出している。

第Ⅹ期（第613図）

第7・11・30・45・53・63・66・71・73・76・79・80・81号住居跡の13軒がこの時期にあたる。最も住居数が多いが、掘り込みは浅く多柱穴化し



第614図 埋設土器を伴う遺構

ており、短期間で建て替えられたとも考えられる。

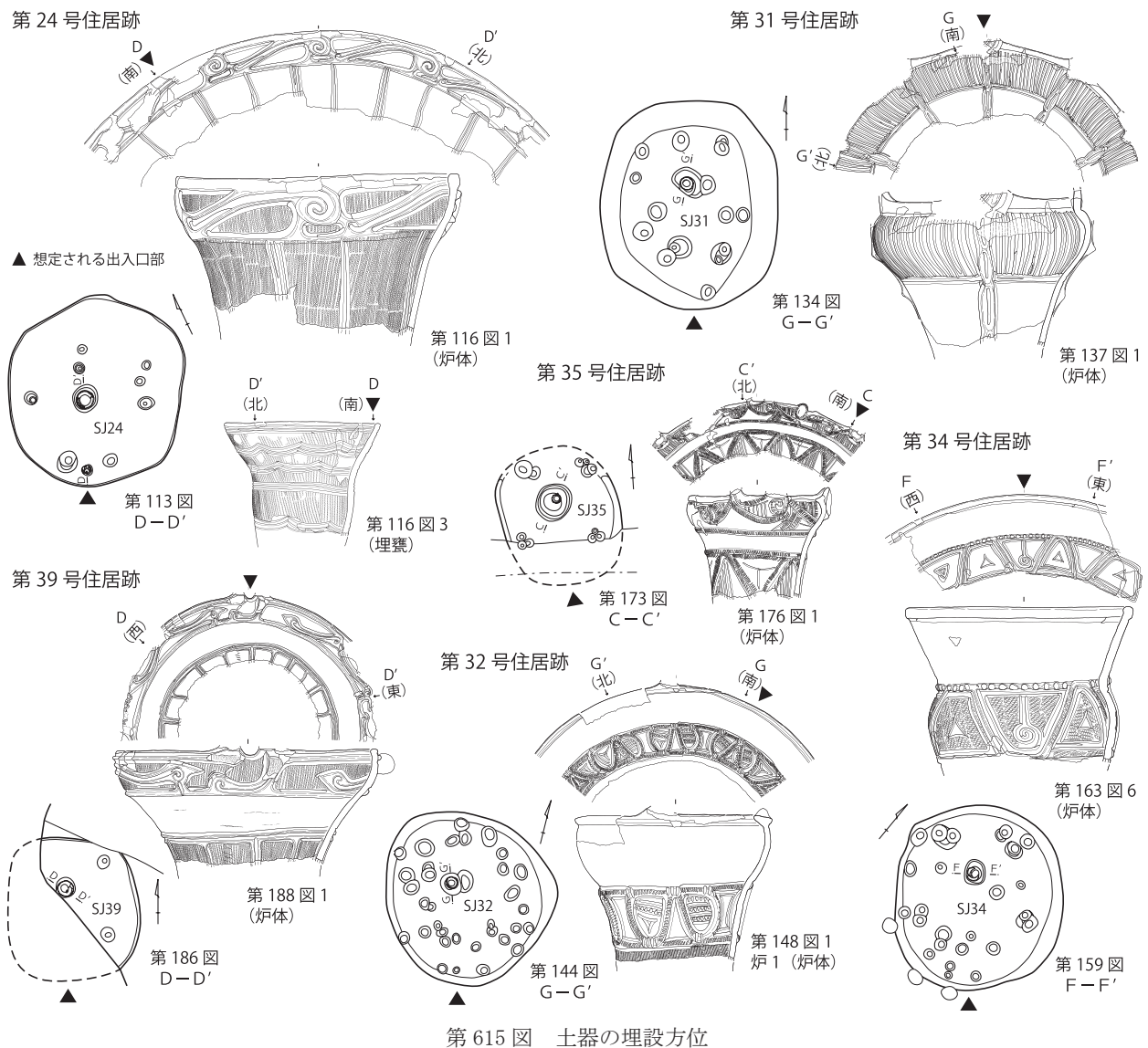
第Ⅺ期（第613図）

第4・29号住居跡の2軒がこの時期にあたる。この時期で環状集落は終焉を迎えている。

以上を踏まえ、住居跡の変遷を概観すると、楕円状の深い住居跡を主体とする第Ⅳ～Ⅵ期、隅丸方形の定型的な住居跡を主体とする第Ⅶ～Ⅸ期、掘り込みの浅い多柱穴化した住居跡を主体とする第Ⅹ～Ⅺ期の大きく3期に分けられる。これを土器から見ると、勝坂式期から勝坂式が残存する加曾利EⅠ式前半期、加曾利EⅠ式後半期から加曾利EⅡ式期、加曾利EⅢ式期となり、住居の変化と土器文様の変化がほぼ重なっている。生活の変化と土器の変化との対応関係が推定できる。

（4）縄文時代中期の埋設土器を伴う遺構（第613・614図）

今回の調査では、埋設土器を伴う土壌や、住居跡が検出された。また、土器敷を行う土壌も検出された。それらは墓の性格と持つと考えられる。単体土器が埋設された土壌は、第613図に見られるように、第Ⅴ期の勝坂式終末期と、第Ⅹ期の加曾利EⅢ式から第Ⅺ期の加曾利EⅣ式期に分布している。第Ⅴ期の勝坂式終末期については、浅鉢形土器や第102号土壌の異系統と考えられる土器が埋設されている。その分布は住居の分布域内である。第Ⅹ期の加曾利EⅢ式以降の土壌は、住居の分布域内からも検出される一方、住居が分布しない中央の広場と考えられる区域からも検出され



ている。第Ⅹ期以前の土壌は検出されておらず、加曽利EⅢ式期以降、広場利用に変化が起こっているとも考えられる。第Ⅵ期～Ⅸ期の単体土器が埋設された土壌は検出されなかったが、第614図に見られるように、住居跡内から埋設土器が検出されることが多いことから、廃絶後の住居を利用した廃屋墓が多用されていたと考えられる。

また、土器敷が行われた土壌は、第613図に見られるように、加曽利EⅢ式期に限定されている。その分布域も住居域内から外れておらず、単体土器が埋設された土壌とは異なっていた。これらと同様の遺構は、春日部市浅間下遺跡からも検出されている。浅間下遺跡では、加曽利E式系と大木式系の土器が敷かれていた。時期も加曽利EⅢ式期であった。中井遺跡でも土器敷に使用された土器には、連弧文系や曽利式系の異系統の土器が必ず混じっていた。類例資料は少ないが、このような遺構の分布域や時期については注目される。

(5) 縄文時代中期土器の埋設方向 (第615図)

炉体土器や埋甕の埋設方向と、出入り口部との関係について検証しておきたい。

第615図は住居の出入り口想定部と、埋設された土器にその方向を印した図である。

第32・35号住居跡は第Ⅳ期の勝坂式新段階、第31・34号住居跡は第Ⅴ期の勝坂式終末、第39号住居跡は第Ⅶ期の加曽利EⅠ式後半、第24号住居跡は第Ⅸ期の加曽利EⅡ式後半である。

第31・35・39号住居跡の炉体土器は、把手部分が出入り口部に向くように埋設されていた。第32号住居跡の炉体土器は胴部文様の区画文の1つが、第34号住居跡の炉体土器は胴部文様の三角区画文内の吊り下げ渦巻文が出入り口部に向くように埋設されていた。第24号住居跡の炉体土器と埋甕については、器形や文様と出入り口部に相関関係はなかった。中井遺跡において、勝坂式期から加曽利EⅠ式までは、土器を埋設する際に住居の出入り口部を意識していたようである。

(6) 古代の中井遺跡 (第616図)

中井遺跡は、荒川流域左岸の大宮台地縁辺に形成された集落跡である。遺跡の北側には、荒川に流れ込む江川が位置する。この江川に向かって南北に伸びる台地上に遺跡は所在し、台地上の南側には、石神遺跡、石神Ⅲ遺跡が存在する。また一方、浅い谷を挟んで西側の台地上には領家・宮下遺跡が存在する。ここでは、両台地に形成された古代集落の消長と動態について考えてみる。

中井遺跡の調査では、古墳時代後期の住居跡2軒と奈良時代の住居跡6軒が検出された。また、石神遺跡からは奈良時代の住居跡6軒、石神Ⅲ遺跡からは奈良時代の住居跡5軒が検出された。これらは同一台地上に展開し、有機的関係があると考えられる。一方の領家・宮下遺跡は、弥生時代末から古墳時代前期の集落と古墳時代後期から奈良・平安時代の集落が営まれている。

各遺跡の動態を更に検討すると、中井遺跡の所在する台地上には、7世紀前半に中井遺跡第1・2号住居跡が存在する。住居跡は江川に近い台地北西側に位置し、北側にカマドをもち、やや器高の浅い口縁部に屈曲をもつ比企型坏が伴う。

7世紀中葉から8世紀第1四半期にかけて中井遺跡の台地上には住居跡が確認できず、集落の断絶が見られる。一方の領家・宮下遺跡は、6世紀代からの集落がこの時期まで継続的に存在する。

8世紀第2四半期になると、石神Ⅲ遺跡第4号住居跡が存在し集落形成が始まる。北武蔵型皿、比企型坏系譜の赤彩された丸底の坏、口唇部が外方に屈曲する丸底の坏が出土している。

8世紀中葉になると、中井遺跡でも集落形成が見られる。中井遺跡第16号住居跡、石神Ⅲ遺跡第1・3・5号住居跡が存在する。この段階の須恵器坏は、口径13～14cm台で底部回転糸切後、外周回転ヘラケズリが施される。体部はやや直線的に外傾で外方に立ち上がる。器壁はやや厚く、底部も厚みがある。南比企産須恵器坏と東金子産



第 616 図 奈良時代の中井遺跡と周辺の遺跡分布・出土土器

須恵器坏が出土し、鳩山Ⅲ期に相当する。土師器坏は口縁部直下までヘラケズリされた平底化の暗文坏、土師器甕は「く」の字状口縁甕である。

8世紀第3四半期は、石神Ⅲ遺跡から中井遺跡に集落の中心が移動し、石神遺跡でも住居跡が見られる。中井遺跡第5・26・27・50・52住居跡、石神遺跡第3・6号住居跡が存在する。須恵器坏は、口径12～13cm台で底部回転糸切り後、外周回転ヘラケズリが施される。体部はやや直線的にやや内傾で外方に立ち上がる。器壁はやや厚く、底部も厚みがある。南比企産須恵器坏と東金子産須恵器坏が出土している。鳩山Ⅳ期に相当する。

8世紀第4四半期は、石神遺跡第1・7号住居跡が存在する。須恵器坏は、口径12cm台で底部回転糸切り後、外周回転ヘラケズリが施される。体部はやや直線的に内湾気味で外方に立ち上がる。器壁は全体に薄くなる。土師器坏は、やや丸みを残す坏とヘラ削りによって平底化が強調された北武蔵型系譜の坏が共伴する。土師器甕は「コ」の

字状口縁甕である。

8世紀末は、石神遺跡第2号住居跡が存在する。この段階になると須恵器坏の口径は11cm台を主体に12cm台のものも含まれ小型化する。底部回転糸切りのままと外周回転ヘラケズリが施されるものが見られる。体部は直線的に外方に立ち上がる。土師器甕は「コ」の字状口縁甕である。

9世紀以降は、中井遺跡のある台地上から住居跡は姿を消す。一方、対岸の領家・宮下遺跡では、集落が再び形成されている。

両台地の集落には、相互依存による集落移動が行われている可能性が見えてきた。さらに、中井遺跡の台地上では、石神Ⅲ遺跡→中井遺跡→石神遺跡へと時間の経過とともに住居跡群が移動していることも明らかになった。

調査区は集落の一部であることから全体の動態は明らかにできないが、今後、周辺の台地も含めた江川流域における古代集落の形成過程と動態が注視される。

引用・参考文献

- 磯野浩司・齋藤成元 2016「デーノタメ遺跡～関東最大級の縄文集落～」『国史跡が拓く縄文の世界Ⅰ～先端研究が照らす縄文社会の実像～』研究成果公開シンポジウム予稿集 明治大学黒耀石研究センター
- 今福利恵 2008「勝坂式土器」『総覧 縄文土器』
- 大屋道則 2016『浅間下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第418集
- 金子直行 2006「縄文中期型環状集落解体への序章－「時（クロノス）」としての土器からみた「場（トポス）」としての集落変遷－」『ムラと地域の考古学』同成社
- 小宮山克巳 2011『領家・宮下遺跡－第1次～3次調査－』（第3分冊）上尾市文化財調査報告第93集
- 笹森健一 2016「縄文中期集落の広場と土坑墓」『土曜考古』第38号 土曜考古学研究会
- 滝澤 誠 2016『楽上・楽上Ⅱ・薬師堂・石神・石神Ⅲ遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第432集
- 谷井 彪ほか 1982「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』1982 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 細田 勝 2008「加曽利E式土器」『総覧 縄文土器』
- 柳田敏司・吉川國男 1969『高井遺跡－桶川西小学校建設敷地埋蔵文化財調査報告書－』桶川町文化財調査報告Ⅲ
- 山本広幸 1988『石神遺跡 山下遺跡－第1・2次調査－』上尾市文化財調査報告第31集
- 吉川國男・今井正文・野口未幾・山田雄正 2000『高井遺跡－第3次発掘調査報告書－』高井遺跡発掘調査会
- 吉川國男・今井正文 2001『高井遺跡－第4次・第5次・第10次・第11次発掘調査報告書－』桶川市教育委員会・高井遺跡発掘調査会
- 渡辺清志 2014『諏訪野遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第410集
- 渡辺清志 2016『諏訪野遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第421集
- 渡辺 一 1990『鳩山窯跡群発掘調査報告書第2冊』鳩山町教育委員会・鳩山窯跡群遺跡調査会

報 告 書 抄 録

ふ り が な	なかいいせき							
書 名	中井遺跡							
副 書 名	一般国道 17 号上尾道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
シ リ ー ズ 名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第 433 集							
編 著 者 名	上野真由美 堀内紀明 坂下貴則							
編 集 機 関	公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所 在 地	〒 369 - 0108 埼玉県熊谷市船木台 4 丁目 4 番地 1 T E L 0493 - 39 - 3955							
発行年月日	西暦 2017（平成 29）年 3 月 22 日							
ふ り が な 所 収 遺 跡	ふ り が な 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
なか い い せき 中 井 遺 跡	さいたまけん あ げ お し 埼玉県上尾市 おおあざ りょうけ あざ なか 大字領家字中 ぼん ちほか 1039 番地他	11219	176	35° 58′ 24″	139° 32′ 32″	20120409～ 20130329 20130501～ 20130628	9,889	道路建設
所 収 遺 跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
中 井 遺 跡	集落跡	縄文時代	住居跡 埋甕 集石土壌 土壌	81軒 4 基 3 基 245基	土器 石器 土製品 石製品	縄文時代中期の住居跡が帯状に 密集して検出された。径 200 mの環状集落を構成する拠点 的な集落とみられる。		
		古墳時代	住居跡	2 軒	土師器			
		奈良時代	住居跡	6 軒	土師器・須恵器 土製品・金属器			
		中・近世	井戸跡 土壌 溝跡	3 基 42基 25条	陶磁器 在地産土器 石製品・金属器 銭貨			
要 約		中井遺跡は大宮台地西縁部に位置し、荒川支流の江川と荒川の合流部近くの台地上に立地する。調査によって、縄文時代から中・近世に及ぶ遺構を検出した。 縄文時代では、縄文時代中期中葉から後葉（勝坂～加曾利 E 式期）の住居跡が 78 軒検出され、拠点的な環状集落であることが明らかになった。 古墳時代では、7 世紀前葉の住居跡 2 軒が検出された。 奈良時代では、8 世紀中葉の住居跡が 6 軒検出され、この地域の奈良時代の集落として貴重な調査事例となった。 中・近世では、溝跡、井戸跡や土壌が谷地に面する調査区の南側に集中して検出された。また、調査区北側では近世の農地開発に持ち込まれた「ヤドロ」が堆積していた。この地区の土地利用の状況が明らかになった。						

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第433集

中井遺跡

一般国道17号上尾道路新設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
(第2分冊)

平成29年3月12日 印刷

平成29年3月22日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1
電話 0493 (39) 3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／山進社印刷株式会社